

動物に由来する地名

：鳥の巻：（1）アヒル川 平田信芳

約50年ばかり前の話になる。二つ年下の弟が「アヒル川でアヒルが泳いでいた。あれは傑作」と、学校帰りの寄り道でアヒルを見かけた話をした。「昔からアヒルが

いたからアヒル川なんだろ」「いや、今まで見たことはない。今日初めて見た。アヒル川ということを知つていてアヒルを放したのだろうか。面白い飼主がいるもんだ」「アヒイバア（家鴨馬場）の横を流れる川がアヒル川で、そこをアヒルが泳ぐか。うーん」

その時、父が西南之役の話を始めた。「十年の戦さの時、西郷さま達は実方から鼓川へくだつて来やつた。セモン坂を真っ直ぐに登つて行つたのが辺見十郎太だつた。二刀流でわき目もふらずに坂を越え、官軍の衆を蹴散らしたそうだ。その間に西郷さま達本隊は、アヒイバアを通つて城山に入いやつた」と、家鴨馬場が西南之役の一つの舞台であつたことを教えられた。

その後、太田道觀が江戸城を築いた時、堀に水禽を浮かべて敵の夜襲に備えたことを知つた。アヒル川もその類で、戦国大名島津貴久が拠つた内城の北側にあり、防禦用にアヒルを放し飼いしたことによると理解でき

る。最近、アヒル馬場・アヒル川が江戸時代の家鴨道場に由来するとの説があることを知つた。加藤清風といふ武芸者が家鴨と号したことから家鴨道場と呼ばれたらしい。しかし家鴨を号した動機を考えると、身近に家鴨がないなればそのような命名は考えられない。また国語辞典によるとアヒルは江戸時代では岡場所の女をさす意味らしいもあつたらしいが、鹿児島の家鴨馬場はそのような痕跡はない。

アヒル川・アヒル馬場は、いうなれば俗称地名。全くの庶民的地名である。しかし、アヒル川は三面張りどころではなく、上に蓋までかぶされ、四面セメント張りの暗渠となつてしまつた。風情も歴史もあつたものではない。八・六水害はそのしつペ返しでもあつた。

その昔、学校の成績は甲・乙・丙でつけられていた。乙の形がアヒルに似てることから「アヒイばっかいじやつた」と聞くことはあつたが、優・良・可・不可世代であるためにアヒルの味は知らない。ただ中国大陸で育つたので、アヒルのくん製・ピータン（アヒルの卵の石灰漬）などの美味は懐かしい。ギョウザ・チャーハンなどの中華料理は日本化したが、ピータンは未だ市民権を得ていないようだ。なお、何故「アヒル」なのかと語源説を調べたが、紹介し得るものは一つもなかつた。

動物に由来する地名

…鳥の巻…(2) 鵜飼と鵜狩 平田信芳

南九州の鵜飼については昭和六十二年五月七日の南日本新聞ひろば欄に江平望氏の紹介記事がある。まず、それを抄出する。

「日本書記によると、アユで知られた吉野川のほとり、大和國阿陀（あだ）郷（現奈良県五條市）には、ウ飼の民がいて、朝廷に仕えていた。この地は、その名から阿多隼人の移住地とみられており、これが隼人とウ飼いとのかかわりを示す一つのあかしとされている。ところが、隼人の服属後、南九州のウ飼いはほとんど文献に表れず、島津義久の家老であつた上井覚兼の記録によると、彼が地頭であつた永吉郷（吹上町）の常波（とこなみ）川は、京の桂川、大井川に劣らぬアユの名川で、彼は幼少からウを五羽も十羽も飼つて、漁をしていたという。」

ところで、鹿児島県地名大辞典（角川）の小字一覧にみえる鵜飼の痕跡地名は次の八例である。鵜飼（鹿児島市岡之原・鹿児島市坂元・牧園町万膳・開聞町上野・開聞町川尻）宇雁（喜入町瀬々串）、鵜狩（喜入町中名）

宇狩（鹿児島市皆与志町）。国語辞典には、鵜飼＝鵜を使つて行う漁。鵜飼人＝鵜を飼いならして鮎などをとることを業とするもの、鵜匠、などの解説はあるが、鵜を使つて魚をとる意味とみられる「鵜狩」を解説するものは皆無である。鵜狩→ウカリ→ウカイ→鵜飼という変遷が推定されるが、鵜狩という地名は鵜をつかまえた場所と理解すべきなのだろうか。その昔、鵜狩という名のサウスボーゲンがいて、プロ野球選手となつたことも記憶している。鵜狩・鵜飼の区別は想像の域を出ない。

鵜の真似をする鳥、鵜の目鷹の目などは、小学生のルタ取りで覚えた文句だが、鵜を実際に見るために海岸に出かけて、それこそ鵜の目鷹の目で見回さないと、うつかり見落とすことになる。

「鵜」にかかる地名を小字一覧から拾うと、鵜ノ瀬（串木野市羽島・東町山門野・上甑村瀬上・樋脇町倉野）、ウノ瀬（阿久根市脇本・市来町大里）、宇ノ瀬（東町浦底・東郷町南瀬）、宇之勢（川内市久住）など、ウノセが十例、その他に鵜ノ鼻（笠沙町赤生木）、鵜木田（菱刈町下手）・卯ノ木（宮之城平川）などがある。ほとんどが海岸に近い所にある。日本国語大辞典（小学館）によると、日本ではウミウを、中国ではカワウを使うとある。古代の隼人もウミウを飼いならしたのであろう。鵜狩・鵜飼のルーツは古代の隼人にあるとみてよい。

動物に由来する地名

：鳥の巣：（3）烏山 平田信芳

梅の花が咲きはじめたが、ウグイスはまだ見かけない。

鶯・鶴・鴨・雁などは渡り鳥という制約があるためか地名例も少ない。ウグイス地名は鶯原（吾平町麓）・鶯牟田（吾平町麓）・鶯山（宮之城町一渡）・鶯多山（薩摩町求名）の四例、ウズラ地名は鶴ヶ原（鹿児島市中）・鶴畠（鹿児島市永吉）の一例。カラモ地名は鴨池（鹿児島市）・鴨堀（鹿児島市下福元）・鴨ヶ城（指宿市新西方）・鴨ノ岡（川内市城上）・鴨ヶ迫（川内市大小路）・鴨毛（川内市東手）・鴨ノ尾（川内市寄田）・鴨瀬ノ上（市来町大里）の八例。カリ地名は鴈川（大口市篠原）・雁田（菱刈町徳辺）・加里牟田（加世田市津貫）の三例。

昔は焼鳥といえば鶏か雀だったが、現在では牛や豚の内藏がヤキトリ屋の主流となってしまった。ときたま雀を見かけるが、鶏は見かけない。もっとも鶏の卵が多い。ネギを背負つて来る鴨の水炊きは美味だが、網で鴨を捕る人も少なくなったのだろう。鴨料理の宣伝を耳にしなくなつた。

これらの渡り鳥に比べると、カラス地名はわりと目に

つく。なかでも「烏山」が多い。鹿児島市宇宿町、阿久根市山下、大口市青木、加世田市津貫、鹿屋市南町、川内市麦之浦、川内市白浜、薩摩町永野、吹上町永吉に「烏山」がある。その昔、夕焼け小焼けで帰るカラスの棲息地があつたのだろう。裏山にカラスの巣があり、「烏山」とか「烏之巣」という地名は付いててもいい。地名として名付けられるのは余程の群れでなければならぬのだろう。

烏山の他に、小烏（加治木町木田）、鴉迫（菱刈町南）、鴉之巣（宮之城町湯田）、烏田（伊集院町猪鹿倉）、烏田平（伊集院町下神殿）、烏口（伊仙町古里）などの地名があるが、いずれも各一例にすぎない。

カラスは鳥類の中では最も知能が高いらしい。そのためか、人間からは目のかたきにされているようだ。「かららすの行水」「かららすの鳴かぬ日はあれど」「かららすの濡羽色」などは良いとしても、「鶏の真似をする鳥」「からすを鷺」などはありがたくない引用である。「權兵衛が種蒔きや、ほじくる」ためか、畑の隅に絞首刑の状態で、かかし代用にぶらさげられる。「カラスの勝手でしよう」の叫びは聞き入れられないようだ。「加治木鳥」の表現もあるので、小うるさいかかあに巻かれる「かららすの昆布巻」で我慢するか。ああ。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

鳥の巻(4) 雉子山 平田信芳

雉子牟田というテニスの女子プロがいる。もともとは隼人町出身のこと。隼人町のどこかに名字の由来となつた地名があつたのだろうが、『鹿児島県地名大辞典』(角川)の小字一覧には見当たらない。カードにあるのは雉子丸(川内市草道)、雉子段(蒲生町漆)、雉子山(高尾野町下水流)、雉山(和泊町和泊)、雉子ヶ平(伊集院町清藤)の5例だけ。鷺・鷹・鳶などを名付けた地名は数多いが、食用に供された雉などは胃袋を満たす対象としかみなされなかつたのだろう。雉の付く地名は少ない。現在は野生の雉など見られなくなり、卵を人工的にかえし幼鳥を育て山に放つらしい。

小学生の頃、広い満州の原野でよく兎や雉を追いかけ遊んだので、雉打ち爺さんのヒューマニティーに共感をもてた。理屈っぽい「雉も鳴かずば打たれまい」というカルタよりも、「雉打ち爺さん雉見ると、メンドリ可哀そ雄綺麗、子の雉可愛い、打たれない」と歌う方に人間味を感じて成長したようだ。

ところで神話・伝説に登場する話の中では、アメノワ

カヒコと雉の話、桃太郎にお伴する雉が有名である。桃太郎の話は知られすぎているので、アメノワカヒコの話を考えてみる。アメノワカヒコはニニギノミコトよりも先に葦原中國に遣わされるが、大国主命の娘と結婚して何らの報告もしなかつた。タカミムスピノカミの命令を受けた雉が様子を見に派遣されるが、天之加久矢で射殺される。その矢が天安河の河原まで届き、返し矢でアメノワカヒコは殺される。葬儀の模様が古事記に述べられている。「喪屋を作りて河雁を岐佐理持とし、鷺を掃持、翠鳥を御食人とし、雀を碓女、雉を哭女とし、如此行い定めて、日八日夜八夜を遊びたりき」。鳥を擬人化して表現しているが、それぞの役割に従つて八昼夜賑やかに葬送のために人々が集まつたことがうかがえる。碓女たちは米について人々に食事を供するために立ち働いた存在であり、炊き出しの慣習は現在も存続している。雉の役割である哭女だが、満州で見た中国人の葬儀風俗を思い出す。プロの哭女がいて儀式の進行に従つて派手に泣いて遺族をリードする。哭女が泣くのをやめると、参列者の泣き声がぴたりと止まる。明治以前は、日本の葬儀もそうだつたのだろう。報酬の米の量によつて五合泣き・一升泣き・二升泣きと哭女の泣き方に差があつたという。今は哭女を見かけることもないし、雉子山も地名だけのものとなつた。

動物に由来する地名

・鳥の巻・(5) 黒鳥と白鳥

平田信芳

偶然性ともいうべきもので面白さも感じられる。白鳥はルビが振つてないが、九州地方はシラトリと読むのが普通であり、その範ちゆうに属するものと考えられる。

三月下旬のことだつた。この暖かさでは鶴たちもすべてシベリアへ帰つただろうなど見るのはなしに荒崎の方を見やると、二羽の燕がチツ・チツと小さな声をあげながらすばやい燕返しを目の前で見せてくれる。なるほど、ツルが去つたらツバメがやつて来る。シベリアへ行つた

りフイリッピンから来たり、自然の営みは悠々たるものがあると同時にまことにダイナミックである。人生、あくせくすることはないと妙に納得する。

愛知だけで、他はほとんどがシラトリである。なおこれだけでシロトリの時代的意味付けは不可能であり、未解決課題として残される。

今回は渡り鳥関係の地名をカードからとりあげる。現在、南九州では見かけないが、黒鳥と白鳥がその昔存在していたことが地名から知られる。ただしコクチヨウ・ハクチヨウではなく、クロトリ・シラトリ（シロトリ）としてである。

その他に大鳥（隼人町姫城・有明町山重）・大鳥山（松元町植木）・大鳥池（国分市福島）・大鳥平（東町山門野）なども大きな渡り鳥にもとづいて名付けられたと見られる。小鳥はちよろちよろしているためだろう。地名に採用されることは少なかつたようである。

鴻ノ巣（加世田市川畑・郡山町郡山・東市来町養母）・鴻ノ峰（西之表市西之表）などからコウノトリが渡来していた時期もあつたことが、地名から類推することはできる。なお、鳥越（119例）・鳥ノ巣（19例）・鳥山（11例）・鳥屋（9例）・鳥淵（8例）・鳥ヶ迫（5例）・鳥田（3例）・鳥の峯（3例）・鳥川（2例）・鳥浜（1例）などの地名もあるが、特定の鳥とは離れてしまつていて、鹿児島地名研究会世話役

黒鳥川（出水市下知識・南種子町西之）
黒鳥（川辺町野間・末吉町二之方）
黒鳥迫（末吉町岩崎）
白鳥（国分市川原・南種子町島間）
種子島南部に黒鳥・白鳥の地名が見られるが、地名の

動物に由来する地名

鳥の巣(6) 鷺の巣 平田信芳

サキノス迫・上サキノス・加世田市内山田。鷺ノ巣・
鷺ノ巣原・加世田市津貫。鷺巣・薩摩町求名。鷺巣段・
入来町副田。崎之巣・川辺町野間。

毎日一度か二度通る所がある。稻荷川(鹿児島市)河口近くの永安橋である。橋より少し上流に寄洲がある。

毎年ブルドーザーで除去しているようだが、二・三回雨が降ると元の木阿弥。こんなのが見ているから、河床掘り下げの激特工事に批判的になるわけである。それはともかく、その寄洲付近に昼間は白鷺、うす暗くなると五位鷺が、ともに一・二羽登場する。じーっと川岸に立つ

てもかく、その跡は濁っていない。跡を濁さずの由来を納得。首を曲げ頭をもちあげて飛ぶ姿は鶴に比べるとやや劣る。兩脚をきちんとそろえて飛ぶものだと見あげていると、少し脚を開いた。おやつと思つたら脱糞。危うく直撃弾を食うところだった。五位鷺の活動は暗くなつてから。

鳥目の域を逸脱している。これらの白鷺・五位鷺がどこに巣くつているのか未確認だが、すぐ近くの多賀山のどこかだろう。

ところで『鹿児島県地名大辞典』(角川)の「小字一覽」にみえる「鷺」地名は次のとおりである。

上鷺ノ巣・下鷺ノ巣・鹿児島市皆与志町。サキノス原・

鷺ヶ宇都(伊集院町飯牟礼・同町下谷口)、夜鷺ヶ宇都東・同西(鹿児島市小野)、鷺築(出水市下大川内)、鷺ノ山(西之表市安納)、鷺松(入来町副田)

これら地名と関係なく、鷺の巣がある所を二か所知っているが、地名にはなつていねいようだ。一つは隼人町住吉にある。天降川河口に近く国道10号線にかかる住吉橋(?)の少し上流に女竹の藪がある。そこに白鷺が巣をつくっている。小村新田と浜ノ市干拓および天降川下流域をえさ場として繁殖したものとみられる。わんさといて竹藪に白い花が咲いたように見える。ただし鳴き声はギヤー。とても美声とは言えない。今一つは列車の窓から見たのだが、阿久根駅北側の裏山。松の大木の上部に鷺の巣があり、低い枝に白鷺が巣くつている。鷺と鳥はよく空中戦を演じているが、白鷺は共存しているようだ。なお新宿線に五位野駅、末吉町諏訪方に五位ノ谷・五位ノ原という地名があるが、これらは五位鷺に由来する地名とみてよいだろう。五位鷺を方言で「ごい」と呼ぶ府県は多く、志布志では五位鷺を「蓑五位」と呼ぶらしい。

動物に由来する地名

：鳥の巻（7）しまめぐり 平田信芳

島巡・島廻などと書き、「しまめぐり」と読む。昭和

六十三年二月の地名研究会例会で問題提起をしたが、未解決のままであった。（地名研究会報第二〇号）。とくに鹿児島県に多くみられる地名であり、長い間、得体の知らない地名の一つとして首をひねって来た。『日本地名総覧』（角川）・『各県地名大辞典』（角川）などから抽出した私の地名カードでは次のような頻度がみられる。

岩手（1）・宮城（1）・茨城（1）・富山（1）・京都（2）・愛媛（1）
福岡（1）・佐賀（6）・長崎（2）・熊本（17）・大分（1）・宮崎（12）
鹿児島（48）

ただし、日本全国の小字すべてについて点検したわけではない。大ざっぱに眺めて「廻」地名が多い県について拾つてみたにすぎないが、鹿児島・熊本・宮崎など九州に多くみられる地名とみてよい。また『旧記録』所収の嘉元二年（一三〇四）・延慶二年（一三〇九）の文書に「しまめくり」という地名がみえ、松元町石谷の「島巡平」・松元町福山の「島廻」と結びつくものかとされている。

「しまめぐり」をどのように理解するかについて、鹿

児島県に特徴的にみられる綱引の一形態である綱（竜神）を引いて集落を一廻りする民俗行事の名残りとしての地名か、あるいは大正三年の大爆発以前に行なわれていた文字通り「島廻」であつた桜島一周の舟漕ぎ競争によるものなど、皆で話し合つたが手がかりは得られなかつた。

七年経過してこのシリーズで「鷺」にかかる事項を調べる過程で、「しまめぐり」に再度出会うことになった。白鷺（しらさぎ）にダイサギ・チユウサギ・コサギと大・中・小の区別があり、チユウサギ（中鷺）に「しまめぐり」の別名があつたのである。県内各地でよく見かける白鷺が中鷺であり、その異名「島巡」が地名の由来となつても不思議ではないと納得する。国分市野口に「島廻」という小字があり、用水路に近い水田で脇に立てた六角塔に幻惑されていた。その水田に白鷺がいたことは憶えている。以下、『日本国語大辞典』（小学館）の「中鷺」の項を抄出する。

「翼長約28-32センチメートル。全身白色。コサギに似ているが、頭上に長毛はない。くちばしは夏は黒く、冬は黄色で先端だけが黒い。あしは指の先まで黒色。日本には数が多く、本土・九州で繁殖し、秋南方に渡る。水田・湖畔などでカエル・小魚を捕食し、林の樹上や竹藪に巣をつくる。：しまめぐり、中鷺の異名」

（鹿児島地名研究会世話役）

動物に由来する地名

・鳥の巻・(8) 雀ヶ宮 平田信芳

オハラ節の一節に「加治木越ゆれば重富・吉野、吉野
越ゆればオハラハ一、鹿児の島」というのがある。逆コ
スで鹿児島の町を離れて吉野の坂にとりつくと、滝の神
(古くは滝の上と書いた)・雀ヶ宮と続く。現在もその
名の付いたバス停がある。雀ヶ宮の集落で神社らしいも
のを探すと「白山姫神社」という銅板葺きの社殿をもつ
神社がある。特別に雀を祀った形跡はないが、江戸時代
は島津家の保護があつたと想像できる。

『鹿児島県地名大辞典』(角川)の小字一覧にみえる
「雀」地名は次のとおり。

- 雀田……鹿児島市吉野
- 雀野……穎娃町郡・西之表市国上
- 雀ヶ原……牧園町宿窪田
- 雀迫……鹿屋市田崎
- 雀穴……知覧町西元
- 燕雀……西之表市西之表
- 雀神……串良町細山田
- 雀喰……指宿市池田

「チーチーパッパ、チーパッパ。雀の学校の先生は、

ムチを振り振りチーパッパ」とか「雀の子そこのけそこ
のけお馬が通る」などと習ったわりにしては人々との縁
がうすい。

宇都宮まで足を伸ばした。一つ手前だつただろう。「雀の
宮」という駅があり、興味をもつた。『栃木県地名大辞典』
(角川)によると、江戸時代の雀宮村は「日光街道雀宮宿」
として賑わつたという。郷社雀宮神社の祭神は素盞鳴命
と藤原実方。歴代將軍の日光社参の途中、参詣するのが
例であつたと伝える。「社伝によれば、長徳元年(九九
五)陸奥守に任せられた藤原実方は、下向の途次当地で
休憩してから陸奥国に向かつた。妻の綾女も実方を追つ
て当地へ來たが、病死したので、その遺言で持つていた
宝珠を埋め、そこに社殿を建て産土神として祀つたのが
創始という。その後同三年九月に実方も陸奥で死んだが、
その靈魂が雀となつて飛び來たり、神祠に入つて奇瑞を
示したので雀宮神社と称し実方を合祀したという。」と。
さて、鹿児島市吉野町にある「雀ヶ宮」は「実方」と
隣り合わせで、一キロも離れていない。宇都宮市にある
「雀宮神社」の社伝と比較して、鹿児島市の「雀ヶ宮」
「実方」は藤原実方と結びつくことが明らかとなつた。
実方は藤原公任や清少納言らと交遊した風流人であり、
和歌の天才にあやかる意味で島津の殿様が名付けた地名
と考えてよいだろう。(鹿児島地名研究会世話役)

動物に由来する地名

・鳥の巣・(9) 高須と高取 平田 信芳

鹿屋市に高須という所がある。高須・浜田・永目と続く海岸の景色は、まことに眺めのよい所である。その昔、天智天皇が高須に上陸され、美しさに打たれて「誰か住む」と聞かれたことから訛つて「高須」になつたと、教師になりたての頃、聞かされた。風土記の地名説話よりもお粗末なこじつけだと、酒の勢いもあつて先輩たちにさからつた。今あらためて『鹿屋市史』をみると、次のように書いてある。「神話の中の神が高須の地で錦江湾の風光を一望し、ここは誰か住むか」と問われた。ここに

〈誰住(たかす)〉の地名が生まれたと伝えられている」と。

こじつけの地名説明であると思いながらもどのような由来をもつのかと、今まで追求することはなかつた。例のごとく『鹿児島県地名大辞典』(角川)で類例地名を拾つてみた。

高須(鹿屋市高須町・末吉町諏訪方・財部町下財部)

鷹巣(大口市曾木・加世田市内山田・川内市田海・栗野町稻葉崎・東町鷹巣・根占町川北・鶴田町鶴田)

郡山町東俣・東市来町養母)

これらをみると「鷹巣」という呼び名から地名が発生したとみなされる。『鹿屋市史』によると、十四世紀の古文書に「隅州鷹栖」とあり、『三国名勝図会』は「高州」、「薩隅日地理纂考」は「高須」と記す、としている。鷹栖は鷹が栖むの意味であり、鷹巣を意識したよび名である。高州・高須などは後世の人々の意味のないあて字であり、それを基礎に荒唐無稽な由来話を創造力豊かに作りあげて来たとみてよい。

高取・高山・高尾なども「鷹」に由来する地名とみなしてよい。なかでも高取(鷹取)という地名は多く見られる。

高取(穎娃町牧ノ内・穎娃町御領・三島村片泊・根占町山本・薩摩町中津川・輝北町上百引・末吉町諏訪方・金峰町高橋)

タカトリ(大根占町神川)

その昔、隼人たちが鷹の巣を見付けては鷹を取り、鷹狩用に飼いならしたのであろう。

(鹿児島地名研究会世話役)

動物に由来する地名

鳥の巻（10）千鳥

平田信芳

バードウォッキング。面白そうだと思うが参加したこ

とはない。あれこれとくちばしを突込まないのが身のためとの自制が働くからである。また、このシリーズで取りあげる鳥はバードウォッキングの対象にならないものばかりだろう。鶏・雀・鳥・鳶・鳩などは身近すぎる。鶯・鶲・鳴・千鳥などは、よく動くためか、地名になりにくいようだ。鳴や千鳥など水辺の鳥は干潟を餌場とするので「潟」という地形地名が優先してしまう。「鹿児島県地名大辞典」（角川）の「小字一覧」でも「しげ・ちどり」地名は類例が少ない。

鳴渡……根占町川北

千鳥島……阿久根市折口

千鳥迫……大口市宮人

千鳥山……大口市宮人

千鳥瀬……隼人町住吉

千鳥田……吉松町川添

千鳥……菱刈町徳辺・大崎町仮宿

「潟」地名は種類・数ともに多く、阿久根市・加世田市・串木野市・川内市・枕崎市・指宿市・喜入町・根占

町などに多く、それぞれ折口川・高松川・万之瀬川・五反田川・川内川・花渡川・二反田川・貝底川・雄川など河口近くに存在している。しかし干拓されて田や畑や住宅地などに変った。近代社会はすべて生産性優先で干潟をなくそうとしているが、自然からいはずれしつべ返しをくらうに違いない。

酔っぱらいの千鳥足は笑いの対象とされて来たが、歌にうたわれた千鳥は昔からなんとなくもの悲しい。夜鳴く鳥の浜千鳥や下田の沖に鳴く千鳥なども、淋しさの潮流をたどれば、いく夜ねざめぬ須磨の関守にたどりつく。現代アーチストの音楽は、千鳥の鳴き声などとは次元が異なっている。ただ騒音の継続で、千鳥が近くに来るところなどあり得ない。

鹿児島湾内を見回しても、砂浜・干潟と呼ばれるものは軒並みに姿を消し、コンクリートの護岸・テトラポットの羅列である。美しい自然という素材をポアしている。つい先日、「重富海岸埋立て見直して」と渚を愛する会が要望書を出したのにに対して、「生態系に悪い影響ない」と町当局は開発審議会に諮問するとの報道があつた。「思川」という地名だけでも、その歴史を探る価値がありそなだが、千鳥の鳴声など聞く耳は持たぬせわしい人々は、生活の利便を楯に埋立てを優先させるのだろう。志布志湾での環境調査も、浜がけなどが出て来るのは予想もされなかつたのだが。（鹿児島地名研究会世話役）

動物に由来する地名

・鳥の巻・(11) 鶴・水流田 平田信芳

名例があることから、あて字とみなしてよい。
水流も「ツル」と読むが、これは鹿児島県・宮崎県で
用いられるだけで、他県では都留の用例が多い。「水流」
の近くに「鶴田」があり、水流と鶴田はつるんでいるの
ではないかと思うほどである。

燕・つぐみ・鶴。これらの鳥はいつの間にかツーと飛
んで来て、気付かぬうちにツーと帰つて行く。燕・つぐ
みは小型であるためか、県内で地名に付けられたものは
ない。日本アルプスに燕岳、新潟県に燕市があるので皆
無とはいえないが、特別な地名例とみてよい。それに比
べると「鶴」が付く地名は多い。しかも、古来、瑞鳥と
して大事にされてきた。『鹿児島県地名大辞典』(角川)
の「小字一覧」にみえる「鶴」地名の主なものを眺めて
みよう。カッコ内の数は地名例を示す。

鶴田(36) - ツルタと読むものもあるがツルダが大半。
水流田(4)は鶴田のあて字とみなされる。鶴ヶ迫(9)、鶴山
(5)・水流山(1)、鶴ヶ崎(5)、鶴ノ前(5)、鶴丸(4)、鶴牟田(4)、
鶴ノ子(4)、鶴原(3)・多津原(1)、鶴窪(3)、鶴園(3)、鶴岡(2)、
鶴峯(2)、鶴川原(2)、鶴籠(2)、鶴畑(2)、鶴留(2)、鶴重(2)、
鶴ヶ城(2)、その他に鶴川内・鶴越・鶴島・鶴ヶ野・鶴ノ
里・鶴ノ羽・鶴平など一例だけの「鶴」地名も数多い。
これらのうち、鶴丸は人名にもとづく地名、鶴ヶ城・鶴

水流(40)・鶴(3)・上水流(30)・上鶴(2)・髪釣(1)・下水流(39)・
下鶴(1)・中水流(23)・中鶴(6)の地名例を見比べると、鶴・
上鶴・中鶴・下鶴・前鶴・向鶴・桑鶴などの「鶴」は
「水流」のあて字とみなしてよい。大水流(2)・大鶴(2)、
小水流(2)・小鶴(2)は水流・鶴とは決められない。

この四月、出水市にクレイン・パークという名の「鶴」
博物館が完成した。鳴き声を確かめるために訪れ、鳴き
声のボタンを押すと「ツール鶴々」。なる程と納得した。
以上書きあげて安心して寝についた。一夜明けて読み
直すと、二百字分不足。どうしようもないのを取りあげ
なかつた「鶴」地名を以下に羅列せざるを得ない。鶴穴・
鶴ノ石・鶴係・ツルカラサ子・鶴木・鶴出山・鶴巻・鶴見・
池鶴・岡元鶴・錐子鶴・北鶴・蔵鶴・塩鶴・添田鶴・竹
鶴・飛鶴・長尾鶴・灰鶴・化鶴・花鶴・ヒコツル・舞鶴・
丸鶴・文字鶴など。これらの中には「水流」の化けたも
のが入つている。解説の省略はご容赦を。

水流も「ツル」と読むが、ほとんどは「鶴」
を目印とした地名である。鶴ノ前は水流ノ前(6)という地

(鹿児島地名研究会世話役)

動物に由来する地名

・鳥の巻・(12) 德光(とつこう)平田信芳

得幸——祁答院町蘭牟田
戸子田——とこだ。薩摩町求名

山川町岡児ヶ水(おかちゅがみず)に徳光神社というの

藤光——つうこう。長島町藏之元
袋山——川内市白浜

がある。十八世紀はじめに琉球から甘藷を持ち帰り、それが「さつま芋」の名で日本中に広まるきっかけを作ったとされる利右衛門を祀っている。しかし、宣伝が足りないのか、徳光神社も利右衛門あまり知られていない。

最近では徳光スイカの名の方が知られている。著名なスイカの産地である。「徳光」は小字名であり、その土地の名を名乗る神社はいわゆる氏神(うじがみ)または産土神(うぶすながみ)とみなしてよい。

「とつこう」とは何に由来するものなのか。

鹿児島県地名大辞典(角川)で類例を拾うと、十数例見出せる。

徳光——とくこう。輝北町下百引・高尾野・山川町
岡児ヶ水
徳光迫——とつこうざこ。鹿児島市小野
徳光岡——伊集院町郡
徳光平——鹿屋市海道町

時光下——とつこうした。川内市城上

方言「とつこ」は擬音だろう。梟(ふくろう)の鳴き声を「とつこう」と理解したと考えられる。得幸と聞えた

り、徳光と聞えたりした人々は、そのようなことを期待したから有難みを感じたに違いない。このはずくは「仏・法・僧」と聞くと言われているが、ぱーっとしている私などは「ぱっぽっぽー」と聞こえる。

なお徳光作(とくみつづくり。長島町城川内)という地名は徳満(とくみつ)の類で、昔の開発名主の名に由来する人名地名である。これは瑞祥を願う昔の人多い命名である。

(鹿児島地名研究会世話役)

動物に由来する地名

：鳥の巣：（13） 飛山・飛迫・飛石など 平田 信芳

十一月・十二月の頃、高度百メートルほどのところをヒヨロロと鳴くのを見かける。鷺や鷹と同類だが、日本列島が気に入っているのだろう。あちらこちらと渡り回ることはないと言いたげな振舞いである。漁港に近い山や岡の高い樹木の上に巣を作っているのだろうが、鷺巣そのものを見たことはない。少年時代の山歩きが足らなかつたようだ。『鹿児島県地名大辞典』（角川）の「小字一覧」にみえる「鷺」地名を以下眺めてみる。

多いのは鷺巣・鷺ノ巣（22例）。うち飛巣・飛ノ巣が各一例ある。飛松（20例）も多いが飛松伝説は聞いたことがない。鷺がとまっている松ということだろうが、鷺松の表記はない。飛山（6例）と鷺山（3例）、鷺之尾（6例）と富ヶ尾（1例）、飛石（5例）と鷺石（1例）、飛迫（3例）と鷺迫（1例）などは当て字の方が多い。飛岡（1例）と鷺岡（1例）では五分々々。鷺取・鷺屋・鷺段などは「鷺」地名であることに疑いをもつ者はいないが、飛崎・飛鼻・飛川原・飛ヶ原・飛落・飛丸・飛田・飛ヶ平・飛瀬・竹之飛などは「鷺」の当て字とは容易に

氣付かない。ただ「飛石」の場合、飛石づたいに浅瀬を渡る意味がある。しかし渡る手段の飛石よりも「瀬」の方が地名としては重要な要素と考えられるから、瀬を渡る飛石でなく形状が鷺に見える鷺石と見るべきであろう。以下の地名はそれぞれ現地を訪れて鷺が輪を描きながら飛ぶ姿や、鷺に似たところを確かめたいとは考えてはいる。

飛石——阿久根市脇本・枕崎市枕崎・東町川床・佐多

町辺塚・日吉町日吉

鷺石——開聞町十町

飛山——姶良町平松・穎娃町上別府・入来町浦之名・薩摩町永野・末吉町二之方・末吉町深川

鷺山——鹿児島市西別府・出水市莊・加世田市宮原

飛迫——笠沙町赤生木・伊集院町飯牟礼・伊集院町下

谷口

鷺迫——加世田市武田

飛野——入来町浦之名・樋脇町塔之原

飛岡——垂水市海潟

鷺岡——郡山町西俣

鷺が鷹を生む・とびが鳴けば風が吹く・とんびに油揚をさらわれる、などの文句はあるが、鷹に比べると冷遇されている。鷹師・鷹匠と鷺職・鷺人足とでは歴史的身分差は歴然。

（鹿児島地名研究会世話役）

動物に由来する地名

鳥の巻（14）鳩峯・鳩ヶ山 平田信芳

鳥越（129例）・鳥巣（20例）・鳥屋（11例）・鳥山（11例）・
鳥淵（8例）など、特定の鳥にもとづかない地名はわりと
多い。また鷺・鷹・鳶・鶴・鷺・鴨など大型の鳥も地名
に採用されやすい。しかし、鳩・百舌・雲雀・雀・燕な
ど小型の鳥は動きが早いためか、地名にはなりにくい。
平和の象徴とされる鳩でも県内に10例あるだけである。

鳩峯（鹿児島市吉野・宮之城町湯田）
鳩ヶ山（大隅町坂元・輝北町上百引）
鳩地山（祁答院町蘭牟田）
鳩宿前・下鳩宿（鹿児島市山田）
鳩塚・鳩塚ノ下（加世田市武田）
鳩平（開聞町十町）
鳩ヶ迫（宮之城町虎居）
鳩越（市来町大里）

小学校一年生の教科書は「サイタサイタ、サクラガサ
イタ」からであったが、大正年間の人々は「ハナ、ハト、
マメ、マス」からであったという。昭和一けたの「ポッ
ポッポ、ハトポッポ。マメガホシイカ、ソラヤルゾ。ミ
ンナデナカヨク、タベニコイ」に対して、明治大正組は

「ポッポノオウチハ、シカクナオウチ、マルイオマド。
マルイマドカラ、アタマラチヨツトダシテ、ポッポー
ハヨー、ポッポーオハヨー」と歌う。これは飛ぶ鳩でな
く鳩時計の鳩。神社や寺の境内に行くと、さあーと舞
いおりて来る鳩の方が何となく親しみがもてる。しかし
「豆が欲しいか」につられて餌をやるために鳩が増えす
ぎた。今ではその糞害に憤慨して、ビニール製座布團型
風船に弓矢の的状に大目玉を描いた鳩おどしを作る破目
に陥っている。

われわれが鳩と言っているのはイエバトだが、最近ではヤマバト別名キジバトも人里でよく見かけるようになつた。山に自然林が減って餌が少なくなつたためか。ヤマバト・ヒヨドリ・ツグミなどを獲る暇人がいなくなつたためか。それとも鳥獣保護のために狩猟法が変り、益鳥に指定されて捕獲が禁止されているのか。猪・鹿・鴨の狩猟は今でも話題になるが、ヤマバト・ヒヨドリ・ツグミなどを撃つ話は聞かなくなつた。これらの鳥を撃つのが馬鹿馬鹿しくなつたのか、毛をむしって焼き鳥にするのが面倒くさくなつたのか。鳥たちには平和な地球環境になり、人里に警戒なしに舞いおりてきているのだろうか。その昔、獵師たちは鳩峯・鳩ヶ山に入つて間伏を作り、長時間、鳩が松の梢に舞い戻つて来るのを待つていたのだが。

（鹿児島地名研究会世話役）

動物に由来する地名

・鳥の巻・(15) 鵜ヶ宇都 平田信芳

吹上町永吉に「鵜ヶ宇都」という小字がある。どのように読むのか吹上町に問い合わせていない。宇都是鹿児島方言で狭長な谷を意味する。鵜は手持ちの辞典では見出せない文字であるが、舟にかかわりのある鳥との見当はつく。三年ほど前、地名研究会例会で肥後芳尚氏が「牛根にビシャゴ岳という山があり、昔は鹿児島通いの舟にとまることがあつた。ビシャゴがとまとると縁起がよいと喜んでいた」と語られた(地名研究会報第40号)。

帰宅後「鹿児島万能地図」垂水市のページを開くと、鵜^{ビシャゴ}岳とルビが振つてある。標高は八八五メートル。鵜は国字の一つと考えられる。このことで鵜ヶ宇都(びしゃごうと)と読めるようになつた。

【鹿児島県地名大辞典】(角川)の「小字一覧」および「鹿児島万能地図」から拾つた「びしゃご」地名は次の通り。

ヒシャゴ(阿久根市脇本)

ビシャゴ谷(喜入町生見)

鵜ヶ宇都(吹上町永吉)

鵜岳(垂水市牛根麓)

ビサゴ瀬(志布志町枇榔島)

毘砂ヶ野(志布志町四浦)

これらのなかで鵜岳や毘砂ヶ野は海岸の地名ではなく、いうなれば山奥になる。びしゃごは海岸だけでなく山中の岸壁や樹上に巣を作り、海や川で捕らえた魚を保存する習性があるらしい。人間から見れば山奥だが、鳥の身になればひと飛びで達する所である。人里を離れた方が安全である。山の中で魚が空から降つて来たとか、発酵した魚すなわち天然の魚ずしの話を聞くことがあるが、それらはびしゃごの所産とみてよい。また魚踊(国分市川原)・魚釣迫(溝辺町麓)などは、どちらかというと山里の地名になるが、これらは川で釣れる魚を考えるよりも鵜が運んで来た魚に由来するとみるのが妥当かも知れない。

ところで、「びしゃご」は方言であり、普通は「みさご」と呼ぶ。「みさご」は漢字で鶴または雎鳩と書く。雎鳩(しょきゅう)。学生時代に習つた『詩經』の冒頭の懐しい字句である。

閨閨雎鳩

閨閨たる雎鳩は

在河之洲

河の洲に在り

窈窕淑女

窈窕たる淑女は

君主好逑

君主の好逑

四十年ほど前、窈窕たる淑女とみなして妻としたが、いやはやどうして牛耳られつ放し。雎鳩はもの静かな鳥ではなかつた。

(鹿児島地名研究会世話役)

動物に由来する地名

ワシデ山—笠沙町片浦
鷺塚——大崎町菱田

：鳥の巻：（16）鷺ヶ迫 平田信芳

鳥の中でのトリ。それは鳥の王者「鷺」に落付く。しかし大空を飛ぶ鷺の姿を実際に見たことはない。見るのは図鑑・テレビなどに限られる。実物はその昔動物園のおりの中にいるのを見ただけ。おりの中のオジロワシはしょぼくれた感じだった。東ローマ皇帝およびロシア皇帝の紋章が双頭の鷺であったことは高校世界史の教科書でお目にかかるが、これも遠い過去の世界の話にすぎない。『鹿児島県地名大辞典』（角川）の「小字一覧」から「鷺」の付く地名を拾いあげてみても、全部で一三例である。これらも地名として残っているだけで、実際に鷺が生息しているとは思えない。

鷺ヶ迫—鹿屋市花岡町・大根占町城元・大隅町恒吉・輝北町上百引
鷺ノ迫—大隅町中之内
ワシガサコ—輝北町市成
鷺之尾—山川町大山
鷺ヶ尾—大根占町城元
鷺野——喜入町生見
鷺ヶ谷—大浦町大浦

これらを眺めると高隈山・野間岳・佐多岬などの山深い所にその昔鷺が生息していた時期があつたということだろう。辞典類をみると、大形のものをワシと呼び、小形のものをタカというらしい。その大・小の区別もはつきりした区別はないようである。日本にすむのはオオワシ・イヌワシ・オジロワシなどという。二月一九日付の朝日新聞によると、国の天然記念物であるイヌワシは全国で百三十四つがいが確認されているだけ。その営巣地の一割以上が林道・ダム・スキー場の建設のために消滅の危機にあるらしい。努力の甲斐もなく絶滅したトキに比較すると、猛禽類の保存はさらに難しさが増すだろう。今年はヒヨドリ・ツグミ・ウグイス・メジロなどがわが家の庭に立ち寄る姿を見ることはなかつた。自動車の騒音・排気ガスなどによる環境の変化は鳥類の生存にも大きくかかわっているに違いない。鷺・鷹などが地名だけの存在になつたのではないかと見回している現時点は、小鳥さえ姿を見せなくなることの始まりかも知れない。鳥肌が立つほどの環境悪化に気づかない人間は鈍感なのだろう。鳥をアホウとは笑えない。鳥の巻のしめくくりは、とりとめのない話になつてしまつた。

（鹿児島地名研究会世話役）

動物に由来する地名

(16)

：十二支の巻： 鼠引 平田信芳

今年の干支は丙子。ネズミ年になる。十二支にかかわる動物を取りあげることにする。そのように方針を決めたのはよいが、地名カードを取り出してみると、トップ・バッターのネズミはたつたの4例。

鼠ヶ尾—吉田町東佐多浦

鼠 堂—川辺町清水

鼠 引—笠沙町赤生木

鼠 渕—阿久根市脇本

たまたま拾い読みした新人物往来社「日本歴史地名総覧」(平成六年十月刊行)に「ネズミ地名」という解説があつた。長谷川恵農学博士の執筆である。ネズミを専門とする学者がいるのだから日本という国はしあわせな国である。長谷川博士によると日本のネズミ地名は約二七〇例。十五種類に分類される。

- 1、鼠の形態に基づく地名——鼠島・鼠石
- 2、鼠の生態に基づく地名——鼠坂・鼠穴
- 3、鼠の生息に基づく地名——鼠谷・鼠原
- 4、鼠信仰に基づく地名——鼠尾・鼠送り
- 5、鼠伝説に基づく地名——鼠袋・鼠宿
- 6、鼠の卑称に基づく地名——鼠岩屋・鼠鳴

7、不寝見から転化した地名——鼠持・鼠坂
8、子隅から転化した地名——鼠町・鼠島
9、湧水から転化した地名——鼠田・鼠川原
10、ネ積みから転化した地名——鼠原・鼠新田
11、根津から転化した地名——鼠ヶ関・鼠野
12、念珠から転化した地名——鼠坂・鼠久保
13、崩壊地形に与えられた地名——「舐る」からの変化として崩壊地形を示す。

14、植物地名から生まれた地名——鼠地・鼠原
15、「ソ」音を含む名前から転化した地名——鼠入・鼠藏

鼠ヶ尾・鼠渕はネズミの異常発生を機に成立した地名と理解できる。鼠堂と鼠引は15の例と思われる。ネズミが騒動することを掛詞とした鼠堂の解釈は上出来か?

鼠引は「そびき」と読むのだろう。そびきは「そびく」の名詞形。昔のサ行音はシャ・シイ・シユ・シェ・シオが普通である。これは醤油(ソイ)・焼酎(ソツ)の表現とも関連する。また、そびく||しょびく→しょっぴく、の変化が想定できる。「しょっぴく」は番所や警察署へ連行することだが、その語源は「鼠引」に遡るのはないだろうか。ネズミがこつそり食べ物を引っぱつて行くのが「そびき・そびく」と解釈すると、すなおに理解できる。鹿児島の言葉・地名には意外なものが残っている。全国的な地名分析がなされていると、少数例でも考察できることが分かつた。

(鹿児島地名研究会世話役)

動物に由来する地名

(1)

十二支の巻：牛牧

平田信芳

いう小字が19例(34例)あることは事実であり、そのギャップは今後の課題として残さざるを得ない。江戸時代は「牛」を眼中に入れなかつたのだろうか。以下参考までに「牛牧」地名を列举しておく。

「ネズミ」地名を調べる研究者がいたことに感心して、いたが、「ウシ」地名にはその上を行く人がいた。「地名が語る和牛の足跡」を全国的視野で調べようとしているのである。たまたま本屋で本間雅彦著『牛のきた道』(未来社)に気付き、購入して一気に読んだ。本間氏は佐渡牛を眺めながら牛のルーツの考察に進まれたのである。牛地名が最も多い鹿児島県にとくに注目し、計二〇六例の牛地名を列挙される。私の地名カードでは一八六だが、上・下、東・西などの分割地名を本間氏のように一地名として数えると計二四五例になる。以下例のごとく『鹿児島県地名大辞典』(角川)の小字一覧から類例の多い牛地名を掲げる。カッコ内の数は分割地名を含む。

牛牧19(34)・牛迫15(20)・牛道14(17)・牛渡7(11)・牛瀬戸6(10)・牛掛5(10)・牛堀5・牛込5・牛小屋5などが主なものである。

ところで薩摩藩の諸制度を解説した『島津家列朝制度』という本がある。その巻之六を見ると、「御領国中牧数」の項に牧の名が記してある。宝永六年(一七〇九)は18か所、寛政元年(一七八九)は牧数17か所とし「牛牧ハ無御座候」と但し書きが付けてある。しかし「牛牧」と

牛牧(鹿児島市吉野・指宿市池田・加世田市川畠(7))・鹿屋市大浦・鹿屋市上高隈・垂水市海潟・佐多町馬籠・佐多町辺塚・田代町川原(3)・根占町川南(2)・根占町山本・大崎町井俣・大隅町月野・末吉町岩崎・末吉町深川(5)・姶良町下名(2)・加治木町西別府・福山町福地(2)・頴娃町御領)

『牛のきた道』には今一つ見落とせない説が述べてある。琵琶首・枇杷首などの「ビヤクビ地名」は牛の古称ビヤに由来するもので、ビヤクビは牛畑・牛田を意味すると解説する。この説を発展させると、県内に約50例ある正体不明の「野首」地名はビヤノクビの変形とみるとも出来る。大根占町神之川(ビハ・野首)、根占町山本(琵琶・野首)、根占町辺田(琵琶・野首)、鹿児島市下福元(枇杷野・野首)などはビヤ・ノクビが分かれてそれぞれが独立した小字となつてゐる。さらに生見野久美田などが加わると解釈が厄介な地名になりそうだ。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(18)

十二支の巻・大虎

平田信芳

「虎」をイメージアップするとすれば、動物園・タイガーマスク・阪神タイガースあたりが、まあ普通。古い世代になると加藤清正の虎退治の話、さらに鹿児島の郷中教育を知る者ならば「虎狩」の話へと発展する。今ではほとんど聞くこともない話なので、まずこれを簡単に紹介しよう。文禄の役に際し、島津義弘の軍勢が豊臣秀吉の風邪薬にと求められて虎を二頭しとめる。一頭は溝辺郷の長野祐七郎、一頭は清水郷の安田次郎兵衛の手柄であつた。長野祐七郎の子孫は溝辺町竹子に在住し、虎狩りの絵を伝える。安田次郎兵衛は主君島津彰久が病死した後を追つて殉死した。国分市清水の楞嚴寺墓地に彰久墓のうしろに小さな墓があつたそうだが、昭和二十年米軍機の爆撃で主君の墓とともに木つ端微塵となつた。今も爆撃の痕跡が窪地になつて残つている。墓石まで不運とは。

『鹿児島県地名大辞典』(角川)から抽出した「虎・寅」地名を次に列挙する。

虎石(川内市湯田)・寅卯之鼻(加世田市内山田)・卯寅(山川町福元)・大虎(串木野市冠岳・日吉町吉利)・寅ケ尾(吉田町宮之浦)・寅川(下甑村片野浦)・寅迫(末吉町

岩崎・牧園町宿窪田)・虎迫(有明町伊崎田)・虎迫尻(大隅町月野・末吉町岩崎)・寅ヶ谷(笠沙町赤生木)・虎坊(出水市上鯖渕)・上虎(串木野市冠岳)・虎山(東町山門野)・市東鹿籠)・虎木ヶ宇都(喜入町中名)・虎居(宮之城町)・虎居ノ迫(宮之城町虎居)・中虎(末吉町岩崎)・虎殿迫(吹上町永吉)

大虎。ウトラもしくはオオトラと読むのだろう。飲ん兵衛の大虎は普段は借りて来た猫のようにおとなしいのが相場であり、地名になることはない。丑寅または寅卯の方角は、いわゆる鬼門にある。鬼門の方角を守護するためには、谷などの地名を創り出したとみられる。虎は日本に生息しない動物なので、「虎」地名は十二支か人名かによつたと理解出来る。

平成六年の春、琴平宮の門前町で讃岐うどんを味わつた時、左甚五郎が彫った欄間の虎と出合つた。犬と猫の合いの子のような動物で、これが江戸時代人の虎かと驚いた。それと同じ格好の虎の石像を稻荷川河口近くの宅地で見付け、機会を見て紹介しようと想っていたが、河川工事に捲き込まれていつの間にか消えていた。これも移設保存というのだろうか。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(19)

十二支の巻： 兔氏 平田信芳

大量消費社会では「兔追いしかの山、小鮒釣りしこの川」は単なる歌の文句になつた。地名として残つてゐるもののはと地名カードを引き出してみたが、例は少ない。

『鹿児島県地名大辞典』(角川)の「小字一覧」にみえる「兔」地名を以下紹介する。

兔田（ウサギタ）は数が多く25例ほどある。兔の存在にもとづいて名付けた標識地名、もしくは方向・順番を十二支で表現した場合の「卯」に対応する地名とみられる。免田（ウサギタ）と書いたものが2例あり、免田（メンデン）を誤つてウサギタと読んだ場合も考えられる。これ以外は実際に「兔」と関連がある地名とみてよい。

(A) 兔氏（宮之城町松野・財部町下財部）、兔狩（西之表市安納）、兔町（東市来町伊作田）

(B) 兔ヶ宇都（輝北町下百引）、卯先ヶ宇都（牧園町持松）、兔迫（加世田市川畑・吹上町中之里）、兔山（阿久根市西目・川内市五代・溝辺町麓・郡山町有屋田）、ウサギ平（穎娃町別府）、兔坂（吉田町西佐多浦）、兔谷（東市来町養母）

(C) 兔耳（姶良町北山）、兔口（吉松町中川）、兔尾

(D) 兔豆（輝北町上百引）
兔豆（ウサギマメ）は何を意味するのか不明。兔が好む豆か。(C)群は兔を標識とした地名。(A)群は狩猟に関連する地名とみられる。とくに兔氏は猫・猿に類似地名が多い。犬・猪は皆無ではないが類例が少ない。

猫之氏（西之表市伊闇）、猫宇治（福山町福地）、猫内（福山町福山）。

猿氏（西之表市伊闇・川辺町上山田・中種子野間・中種子町坂井・南種子町中之上・末吉町諏訪方）、猿内（加世田市内山田・加世田市小湊・川内市寄田・牧園町持松・川辺町本別府・川辺町宮・川辺町神殿・郡山町東俣・蒲生町白男）、猿打（出水市上鯖渕・加世田市小湊・霧島町田口）。

犬之内（鹿児島市皆与志町）、犬待（阿久根市脇本・高尾野町江内）、犬ワナ（出水市上鯖渕）、完打（財部町北俣）。

民俗学の用語で猪・鹿・カモシカ・猿・兔などの山中ににおける一定の通路をウジという(『民俗地名語彙事典』)。小字を見ると、「打」が「内・氏」に変化しているようと思われる。また兔だけでなく犬・猫・猿も狩猟の対象だった。古代人の胃袋に、敬礼。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(20)

：十二支の巻：辰喰

平田信芳

竜と辰に因む地名を思い浮かべてみよう。天竜川・竜安寺・竜谷大学など県外のものは別としても、大竜小学校・上(下)竜尾町・竜郷・竜門の滝・竜門司焼・竜ヶ水・竜王・辰喰などを思いつく。

まず大竜。これは大竜寺という寺の名に始まる。島津家第15代貴久(大中公)と第16代義久(竜伯公)の号から一字ずつもらつて名付けた。さらに大竜寺背後の岡を「竜尾」と表現し、竜尾町という名が生まれた。竜郷は西郷南洲流謫地としてよく知られているが、なぜそのように呼ぶのか、その由来がわからない。竜郷町の地図を見ると竜の頭に形が似ているような気もする。また「竜」姓の人が多く居住していたことによるものか、若干データ不足である。加治木の竜門の滝・竜門司は有名な竜門に景観が似ていることから命名された。加治木の殿様が学のあるところを示されたことによつている。錦江の命名も同様。

近年崖崩れによる大災害をくり返し、竜神の怒りを招いたかと恐れる「竜ヶ水」は、調べてみるとそんなに古い地名ではない。明治一七年(一八八四)に出来た『鹿児島県地誌』をみると、鹿児島郡吉野村(現鹿児島市吉野

町)の字地は菖蒲谷・帯迫・雀ヶ宮・中ノ町・七社・上野(山)村ノ東海浜ニアリ、東西凡一町、南北凡十二町」とある。塩ヶ水では昔塩を作っていたらしく、竜ヶ水には「塩屋」の苗字が多い。恐らく明治三四年(一九〇二)肥薩線(当時は鹿児島本線)が開通した際、竜ヶ水という威勢のよい駅名を付けたに違いない。

竜王は中国渡来の水神。国分高校の近くに竜王社がある昔あつた。付近の田で栽培したタバコに「竜王」の銘柄が与えられ、「タバコは国分」と島津の殿様が宣伝をした。このことはすでに紹介済み(?)。

辰喰はタツバミ・辰番・立番・辰飯・竜喰・竜波見・辰伴・辰バミ・辰上・辰髪など、いろいろな当て字がある地名。水神の使いである竜が喰んだと、神への恐れを示した昔の人々の率直な表現である。県下に32例ほど浸食崩壊地形を示す「辰喰・竜喰」地名がある。32例中5例が国分・隼人地区に集中している。辰喰(台明寺)・竜喰(野口)・竜波見(住吉・見次)・辰伴(佳例川)・竜ヶ水よりも要注意。昔の人の知恵を見直すことも必要。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(22)

：十二支の巻：蛇渕 平田信芳

C 「じゃ」と読むもの
蛇渕：大口市牛尾、高尾野町下水流、加世田市小湊、枕崎市別府、穎娃町別府、知覧町塩屋、知覧町南別府。

卯辰の女房に巳午の夫。巳午の男だが卯辰の女性にもてたことはない。とくに卯年生まれは美人というが見向きもされない。故に、これをことわざと認めるわけにいかない。俗説として片付ける。身勝手？ 牛や馬はことわざにも地名にも数多く登場するが、巳となると「卯辰の雨で巳にかかる」というしゃれがある程度である。地名カードをとり出してみてびっくり。己ノ崎（日吉町山田）が一例あるだけ。しかもルビはなし。巳は上に己は下に巳にやむのみ中程につくと、中学一年の時教えられたことに照らしてもどのようすに読むのか見当もつかない。手がかりが得られるまで待つことにする。「巳」がないので「蛇」に出て来てもらう。

A 「へび」と読むもの

蛇山：川内市寄田、開聞町仙田、樋脇町塔之原。
蛇野：末吉町岩崎、川辺町下山田、吹上町和田。
蛇田：大隅町大谷、下甑村片野浦。
蛇打：始良町下名。

B 読み不明。多分、へび。

蛇ヶ迫：入来町浦之名、菱刈町前目、菱刈町田中。
蛇池：川内市麦之浦、菱刈町市山。

「へび」と読む地名を眺める時、見つけ次第たき殺さねば気が済まない「蛇打？」は別として、蛇山・蛇野・蛇田などは蛇がいる程度の感覚でとらえられる。積極的に現地に出かけないので読み不明のままにしているが、蛇ヶ迫・蛇池が川内川流域に固まっている。恐らく「へび」と読むのだろう。

「じゃ」と読むものを白地図に点で記すと、喜入・指宿・穎娃・知覧・枕崎・加世田など南薩地域に集中的にみられる。大蛇（だいじゃ）を恐れる感覚が植えつけられてからの呼び名（外来文化？）とみてよい。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(23)

：十一支の巻：馬渡

平田信芳

私の地名カードに「馬場」地名が二五三例ある。「げんのして馬場を歩かん（恥ずかしくて表通りを歩けない）」といわれる面もあるので、その解説は素通りにしよう。駒を含む「馬」地名が三九七例。「牧」地名が四四六例。「笠」^{おち}地名が七〇例ある。牧と笠の区別は知らないが、牧の古い形態を笠というのであろう。これら地名数からも大隅国・薩摩国は、馬の特産地であつたと分かる。

さて、昔の交通路を考える時、どこで川を渡ったかが重要な意味をもつ。『島津家列朝制度』卷之六に記された領内の「橋」数は、寛政年間で五十一。『鹿児島県地誌』にみえる薩摩国の橋数は二三一。うち石橋が九十一。十九世紀の薩摩藩の活力が読みとれる。地名で見ると渡り（一九九）・渡瀬（一七四）・馬渡（七九）・猿渡（九）となる。猿が手足をつないで猿橋を作るという話があるが、地名例が少ないところを見ると、谿谷の上流に猿渡があつたのだろう。馬渡の七十九例は馬で渡れる深さの所を示すのだろうが、馬を利用する時以外は渡るなどいましめた地名なのだろう。人々は安全な渡り・渡瀬で川を渡つたに違いない。

薩摩藩の諸制度を詳細に記録した『島津家列朝制度』という膨大な資料がある。その卷之六に二十か所の牧の名があげてあり、それぞれの頭数も記してある。総計を出すと、宝永六年（一七〇九）が七、一二九頭、寛政元年（一七八九）が五、三六三頭。馬だけの記録である。『鹿児島県地誌』（明治17年刊行。薩摩国の分だけが残っている）には、村ごとに牛馬の数、しかも牡・牝の別が記してある。総数を計算すると、薩摩国だけで牡牛（九、四九五）・牝牛（一六、一九〇）、牡馬（一六、一三五）・牝馬（一八、四七五）になる。牛馬ともに牝の方が大事にされている。それにしても昔の行政はうまく調べたものだ。

地名カードの多いものから順にあげると、○○馬場

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(24)

：十一支の巻：未申の方角 平田信芳

羊や山羊は童話や童謡に登場し動物園で見ることが出来るので子供たちに人気があるが日本では大切な家畜にはなり得なかつた。広大な放牧地や牧草地を得られないからである。「羊」地名は生まれるはずもなく、羊頭狗肉の策はとれない風土なのである。「羊」地名を四方八方探しても無駄なので、その四方八方に焦点をしばることにした。十二支で方位を表現すると、東が卯、南が午、西が酉、北が子になる。それらの中間位を加えると八方になる。すなわち艮（丑寅）・巽（辰巳）・坤（未申）・乾（戌亥）が加わる。わが庵は都の辰巳とか辰巳芸者、乾御門は聞いたことはあるが、丑寅や未申は鬼門・裏鬼門の方角に当たるためか、あまり聞かない。乾坤一擲という表現があるが、その場合でも「坤」に未申の方角を意識することはない。

十月の秋日和を選んで、中旬と下旬に日本列島の西南部すなわち未申の位置にある屋久島と甑島を訪れた。屋久島は最南の式内社「益救神社」を、甑島は「甑大明神」をこの目で確かめることができた。

宮之浦港につくと「大川の滝行」と「屋久杉ランド行」の二台のバスが待機していた。降りた観光客は皆「大川

の滝行」に乗ったが、「屋久杉ランド行」の運転手が屋久杉ランドで定期観光バスに乗り継いだ方が多く見物できると勧めてくれた。おかげで一応の屋久島観光を果たせた。屋久猿はバスにも慣れていて、悠々と道路に寝そべっていた。屋久鹿も現れたが、バスの接近にすぐさま姿を隠し、しかとは見えなかつた。宮之浦から黒島・硫黄島・竹島が順序よく並んで見え、開聞岳および大隅の山々がかすかに見えるのは驚きだつた。また安房から種子島南端が目と鼻の先に見える。種子島からのロケット打ち上げを見るとすれば、屋久島は特等席である。首をあげて見る必要はなく、自然体で眺められる。竹崎から未申の位置だから遠慮して宣伝しないのだろう。

甑島は観光宣伝をしていない遠見山を一回りした。長目の浜を斜め上から未申の方角に見おろし、北を見ると出水の矢筈岳・阿久根の笠山、長島・天草の山が続き、海を隔てて、また島が見える。西側の島は帰宅後地図で検討したら五島列島だつた。市の浦は絶景。紫尾山・冠岳もよく見える。

晴れた日の屋久島・甑島を訪れて、未申の位置から、海の上から日本本土を見る現点が歴史家に欠けていたことを知つた。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(25)

：十一支の巻：猿 噛 平田信芳

「猿」地名は結構多い。現代人が猿のたたりを恐れて、見ざる聞かざる言わざるというわけにはいくまい。『鹿児島県地名大辞典』（角川）の「小字一覧」から拾い出した「猿」地名は次のとおりである。

猿喰⁽³⁰⁾・猿打（猿内・猿氏を含む）⁽¹⁸⁾・猿掛⁽¹⁰⁾・猿山⁽⁹⁾・猿渡⁽⁹⁾・猿口⁽⁶⁾・猿田⁽⁵⁾・猿越⁽³⁾・猿帰・猿川・猿子・猿籠・猿迫・猿走が各二例、猿遊・猿岩・猿尾・猿ノ頭・猿ノ方・猿檍原・猿ノ神・猿楽・猿クビリ・猿獅・猿島・猿ヶ住・猿谷・猿手久保・猿出・申名・猿野・猿浜・猿原・猿待・猿丸・猿守・猿道・猿見間伏・猿牟田・黒猿・白猿が各一例。合計一三二例。

これらを類型化すると、猿打・猿掛・猿クビリ・猿待・猿見間伏など狩猟にかかる地名が三二例。約四分の一になる。猿喰・猿ノ神・猿ノ方など猿を神格化した地名が三二例。これも約四分の一。猿屋・猿守・猿丸・猿樂など人間とかかわる地名が五例。これは特異な分野であり、数は少ない。残りはすべて自由な猿の世界のもの。猿を狩猟の対象とした古代人の食欲には既に敬意を表した。自然状態の猿の観察は靈長類研究所の守備範囲と考える。そうすると地名研究の対象は当然「猿喰」に

落着くことになる。

猿喰⁽³⁰⁾は辰喰⁽³²⁾・鳥喰⁽⁷⁾・蛇喰⁽⁵⁾などと同類の浸食崩壊地名と理解してよい。昔の人々は大雨の後、山や台地が崩れると、神の使いである辰（竜）・猿・鳥・蛇などが喰んだ結果とみなして恐れたのである。

山上憶良の歌「瓜食めば子ども思ほゆ、栗食めばましてしのばゆ……銀も金も玉も何せむに勝れる宝子にしかめやも」（万葉集卷五、八〇二・八〇三）、若き日古典の時間に学んだ動詞「はむ」の活用形である。「はみ」は名詞形になる。また「はぶ」は「はむ」の古形と考えられる。奄美大島のハブおよび伊豆大島の波浮の港はその名残りとみられるし、肝属郡高山町の波見の港も浸食地形に由来するとみてよい。

さて、猿喰のよみは、サルハミ（栗野町米永）・猿ハミ（福山町福山）・サイハン（市来町大里）・サハン（吉田町本名）などの例および辰喰・鳥喰・蛇喰などのよみから「さるばみ」と読んでよいだろう。しかしサルクイ（長島町指江・薩摩町求名・東市来町伊作田）・サイクレ（東郷町斧渕）の例もある。残り一三二例はルビなし。ここに地名研究の隘路があり、いつも歯噛みさせられる。なお「はむ」の現代語は「噉む」である。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(26)

十二支の酉はニワトリを指す。古来人類に飼いならされて来たために主役となることはなく、そのために地名に結び付くこともなかつた。例外は鳥丸。これは酉に男性名語尾の丸を付けたものに由来し、丑丸・寅丸・辰丸・猿丸・犬丸などと同類の地名である。酉丸（鳥丸）といふ人物が開いた土地ということから地名になつたもので、平安時代後半には登場している。県内では東郷町の大字鳥丸がその好例である。

『鹿児島県地名大辞典』（角川）の「小字一覧」にみえる「鳥」地名を次のように分類してみた。

- (1) 鳥の生息場所——鳥巣20・鳥山11・鳥渕8・鳥迫5・鳥ヶ尾4・鳥の峯3・鳥田3、鳥川2。鳥池・鳥河路・鳥崎・鳥ノ城・鳥野・鳥畠・鳥馬場・鳥浜・鳥原・鳥糞・鳥鳴各1。
- (2) 狩猟・駆除を示す地名——鳥越129・鳥打3・鳥取2・鳥追2・鳥地獄1。
- (3) 飼育を示す地名——鳥屋11・鳥飼1。
- (4) 鳥の種類を示す地名——黒鳥6・大鳥5・千鳥3・白鳥2・水鳥2・山鳥2・小鳥1・鳥の子1。
- (5) 人名地名——鳥丸3。

(6) 信仰地名（浸食地名）——鳥喰1。
(7) 形状地名?——鳥口2・鳥首2・鳥足1。

(8) 意味不明——鳥上り・鳥ミシ・ウリウ鳥・下府鳥・飲鳥（アメドリ）。栄長鳥（エイナガドリ）各1例。

総数二五五例中、鳥越が一二九例を占める。このことは鳥越すなわち鳥が越えて来る尾根が人類と大きなかかわりがあつたことを示すものと考えざるを得ない。今はほとんど顧されることもない源九郎義経の「ヒヨドリ越えの坂落とし」という歌の文句から、鳥越は急な坂の印象が濃厚だが、あちこちで見られる「鳥越」は低い丘であつたり、低い鞍部であつたりである。削平された阿久根の鳥越古墳は比高十メートルほどの丘の上にあつた。

その昔、砂石温泉（現蘭牟田温泉）の名物は鴨鍋であった。蘭牟田池から夜明けに舞いあがつて来る鴨を尾根で待ち伏せて、網で捕えるとのことだつた。鴨が飛んで来る通路がそもそも「鳥越」のはじまりなのだろう。鳥が越え易い場所であるばかりでなく、人間にも山越えに都合のよい場所だつたとみてもよい。鹿児島市の磯浜へ通じる道は現在は鳥越トンネルをくぐる国道10号線だが、昔は鳥越の坂を越える山道が普通だつた。今は散歩に通る人もいないし、子供たちを見かけることもない。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(27)

：十二支の巻：犬追馬場 平田信芳

サル・トリ・イヌ。トリを雉子と限定すればきび団子をもらつて桃太郎の家来となつた組み合わせになる。犬猿の間柄を桃太郎は上手に取り持つたに違ひない。犬・猿・雉子の順に家来になつたためか、犬が最も従順な存在だつたとみられる。おとぎ話ではなく日本犬の血液とか遺伝子を分析することによつて日本人・日本語のルーツを探ろうとする研究分野もあるらしい。人と犬とのつきあいが長いことに着目しての発想である。

さて「犬」地名を『鹿児島県地名大辞典』(角川)から拾い出して眺めると、次の五通りに分類できる。

A 犬の生息場所を示す地名——犬山⁽¹⁰⁾・犬迫⁽⁶⁾・犬原⁽³⁾・犬島⁽¹⁾・犬拔山⁽¹⁾・犬ボキ⁽¹⁾

B 犬狩の場所——犬待⁽²⁾・犬垣⁽²⁾・犬之内⁽²⁾・犬ノワナ⁽²⁾・犬堀⁽²⁾・犬坪⁽¹⁾・犬満世⁽¹⁾

C 飼育の場所——犬小屋⁽²⁾・犬飼⁽¹⁾

D 犬追物の遺称地名——犬追馬場⁽¹²⁾

E その他意味不明の地名——犬川⁽³⁾・犬太郎⁽²⁾。以下は各一例。犬五郎・犬頭・犬田・犬畠・犬城・犬牟田・犬唯・犬地・犬ノ番・犬帰・犬ノ道・犬之塔・犬竿・犬本・犬北。

鎌倉時代の武士たちは武技を練るために流鏑馬・笠懸^{やぶさめ かさがけ}を盛んに行なつたといふ。流鏑馬は現在でも神社の祭礼に残つてゐる。しかし笠懸・犬追物は残つてゐない。島津家は古いしきたりを守り、江戸時代の初めまで犬追物を行ない、その手順の記録がある。また県下の主要な麓集落に犬追馬場・犬之馬場などの地名が残つてゐる。

犬追馬場——加世田市武田・隼人町住吉・国分市上小川。

犬之馬場——垂水市田神・菱刈町徳辺・開聞町仙田・末吉町諏訪方・伊集院町下谷口・金峰町花瀬。

犬房迫——垂水市新城・末吉町南之郷・末吉町岩崎(犬吠の変形もしくは犬追の変形)。

犬追馬場のうち加世田市武田の場合は島津忠良(いろは歌で有名な日新公)ゆかりの地、隼人町住吉と国分市上小川は島津家第二代島津義久ゆかりの地名である。本文の主宰者脇本星浪氏宅の前を通る道路はもともと「犬追馬場」と呼ばれるものであり、国分高校校舎の敷地が小字「犬追馬場」になる。国分市上小川の犬追馬場に該当する。犬山・犬迫などでつかまえて来た犬を犬追馬場に追い込み、騎馬の武者たちが鏑矢でねらい撃ちした所であつた。人も犬も飼いならされた今の世には縁のない話であるが。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(28)

取(3)・山瀬(3)・猪鹿倉(2)・猪之迫(2)・猪目(2)・
猪面(2)。

十二支に当てはめられた動物たちを語呂合わせ的ではあるが性格づけしてみよう。ネズミ取りに窮鼠となり、牛じり牛じられるのも嫌だし、丑満時の牛歩は気味が悪い。虎の威を借りたくもないし、猛虎負嵎の威を振るうのは時代がかっている。狡兔死して走狗煮られ、竜頭蛇尾に終るは情けなし。恐るべきは竜巻。蛇頭は容易に馬脚をあらわさず、馬耳東風と聞き流してはいたずらに馬齢を重ねるばかり。羊頭狗肉の策をとつても猿も木から落ち、籠の鳥を歎けば犬も棒に当たる。かくなる上は猪突猛進で一件落着。猪は十二支をしめくくるのにふさわしい。

『民俗地名語彙語辞典』によると「猪は非常に用心深く、人間の通る道や、藪から見通しのよい所に出る時などは、いつたん立ち止まって、安全を確かめ、次の逃避に移るという賢い習慣をもつていてる」らしい。

古来猪は狩猟の対象とされて来たために、「猪」に関する地名は多い。『鹿児島県地名大辞典』(角川)から拾い出したものを掲げる。一例だけのもの55例は省略した。

猪子(8)・完込(7)・猪ノ氏(5)・猪木(5)・猪窪(5)・猪ノ尾(4)・猪谷(3)・猪鼻(3)・宍解(3)・完

「完」は「宍」の誤写。ともに「しし」と読む。「いのしし」と「かのしし(鹿)」が考えられるが、鹿の場合は「鹿」の文字を用いることが多い。宍解(ししどき)は解体場所を指す。狩人たちは猪の通り道を心得ており、それを「ウジ」と呼び「猪ノ氏」と表記する。猪のウジと人の通る山路とが交わる点が「猪目(イノメ)」とよばれる。狩人は猪目で待ち構えて、獵銃を発射する。猪ノ氏・猪目については具体的に小字所在地をあげておく。

猪ノ氏——西之表市現和・南種子町平山

猪の氏——中種子町坂井

猪ノ有路——西之表市西之表

猪之目——鹿児島市山田

猪 目——加治木町小山田

これらは古い表現とみてよい。種子島に「猪ノ氏」が集中的にみられる。

今一つ、猪が水浴びをする湿地(仁田)に待ち伏せて、ねらい打ちする地名もある。

仁田打——吉田町西佐多浦

仁田内——福山町福沢
ニタウチ——輝北町上百引

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(29)

：：獸の巻：「鹿」のつく地名 平田信芳

地名に用いられている漢字はあて字の場合が多いので注意すべし、というのが地名研究の鉄則とされる。しかし頗るなにそのことにこだわり過ぎても変な地名解釈になる。鹿児島県には鹿児島市・鹿屋市・枕崎市鹿籠などをはじめとして「鹿」のつく地名が多い。これらが鹿と関係があるのかないのか、しかと見定める必要がある。類例を列挙して比較すれば然るべき結論を見出せる、と考えるのが地名研究の方法である。

『鹿児島県地名大辞典』(角川)の「小字一覧」から

例のごとく主な「鹿」地名を拾いあげてみた。

A、鹿の種類を示す地名

大鹿オオシカ——東市来町養母
小鹿野コシカノ——隼人町松永

男鹿山——福山町福地

女鹿カガ——鹿児島市下福元
鹿子カガ——大隅町荒谷・大隅町坂元

B、鹿の生息地を示す地名

鹿谷——阿久根市大川・西之表市国上・枕崎市別府・

中種子町油久・南種子町島間

鹿原——鶴田町紫尾・宮之城町平川・伊仙町阿三・伊

仙町阿権

鹿之峰——西之表市古田
鹿尾シカオ——東市来町南俣

鹿田——大隅町中之内
鹿子田——入来町浦之名・東郷町南瀬

鹿口——東市来町養母・吹上町田尻
鹿取シカトリ——国分市新町

鹿込シカコ——大隅町中之内
鹿堀——薩摩町永野

鹿供養——西之表市古田

D、人名地名

鹿丸——市来町川上・東市来町湯田

このように地名例を眺めてみると、これらはすべて「鹿」に因んで名付けられた地名であると見てもよい。そうすると、鹿児島・鹿屋・鹿籠などが「鹿」とは結び付かないと解釈することの方がむしろ難しくなる。鹿児島県は昔から鹿が多くいた所だったのである。鹿児島は鹿兒(鹿の子)に由来する地名、鹿屋は馬屋・牛小屋・鳥屋などと同様の用件で鹿の家畜化をねらった鹿専用の小屋があつたと解釈する方が、地名の由来を考える場合、すなおな解釈になると思う。

例

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(30)

：獣の巻：「鼬」のつく地名 平田信芳

平成九年四月の末、野田町・高尾野町に野良犬が増え、仔豚が30頭もやられたとか、ニワトリが襲われたとかが報道された。ペットが捨てられて野犬化し、小さな家畜を襲う結果となつたらしい。ニュースを聞いた時、二ワトリ小屋をねらうのはイタチと相場が決まっていたのだがと、五十年ほど昔を思い出した。

昭和十年代のいわゆる第二次大戦進行中と昭和二十年代の戦後食糧難時代は、食糧自給の意味もあって、ほとんどの家でニワトリが飼われていた。牝鶏は卵を生むとにぎやかにコケツコツコツ・コケツコツコツと騒ぎ回っていた。その鳴き声にうながされて小屋に入ると、巣箱の中に生み立ての卵があり、そのあたたかさを大事にしながら鳥小屋から出て来るのは楽しいものだった。それだけにイタチに襲われないように頑丈な鳥小屋づくりをした憶えがある。鳥小屋作りは父親の日曜大工の仕事でなく、中学生になつたばかりの息子の仕事だつただけに、イタチの存在を強く意識した。しかし、イタチの姿を見たことはなく、「いたちごっこ」とか「鼬の最後つ屁」という言葉だけの知識に終始した。

テレビが発達し、望遠カメラでとらえた映像で鼬の姿

を知るようになつた。前脚をそろえて何かを大事に捧げ持つたようにたちあがつた姿は韋駄天立と呼ばれる形に似ており、「居立」からその呼び名が生まれたなど一人合点したりしている。

すばしつこい存在であつたためか、イタチを見かけることは昔も少なかつたのだろう。地名になつたものは少ない。県内の小字でイタチに由来すると思われるものは4例である。

井立
——大浦町大浦

伊達
——大口市山野

鼬返し
——薩摩町永野

伊達は本来イタチの當て字として用いられたものだろうが、何らの説明なしに提示されると、奥州仙台の伊達氏を想起して「ダテ」と読まるを得ない。イタチが何故ダテに変化したのか、辞典類を当つてみたが手掛かりは得られなかつた。イタチの姿がダテだつたのではない。伊達政宗の家来が派手な服装で人目をひいたことに由来するとの説明があるだけである。イタチの毛皮をミンクの代りに着用する女性を見てみたいものだが、南国鹿児島には動物の毛皮の襟巻はやはり風土的に似合わないのだろう。寒い北国での夢物語にしておこう。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(31)

・獣の巻・宇曽ノ木川

平田信芳

加治木町に網掛川という川がある。昔、漁師の網に地蔵菩薩が掛かつて引きあげられたことに由来するとの地名伝承がある。先日、志布志町を訪れた時、宝満寺跡の岩屋に網掛地蔵と称するものが鎮座していた。あちこちに網掛伝説があるものだ。ところで、網掛川の支流に宇曽ノ木川というものがある。鹿児島湾の奥には検校川・天降川・崎森川・思川など思わせぶりの強い川の名、久留味川・日木山川（桜川）・楳木川・精木川・甲突川（神月川）など樹木に由来する川の名が多い。深く考えもせずに宇曽ノ木もいすれ出合う日があるかも知れないと考えていた。

『角川日本地名大辞典・鹿児島県』の小字一覧から「ウソ」地名も抽出してみて、のんびり対応してはならないと気付いた。

獺越（川内市城上・川内市中村・川辺町高田）、獺ノ内（宮之城町山崎・東市来町養母・鶴田町鶴田）、獺山（頼娃町御領・蒲生町米丸）、獺ヶ谷（鹿児島市中）、獺木場（鹿児島市小野）、獺之浦（垂水市牛根境）、ウソン川内（横川町下ノ）、ウソ吹（吹上町今田）

ほとんどが獺（ウソ）に由来する地名である。獺（川

獺）はイタチ科の動物でイタチの2~3倍の大きさ。二ホンカワウソは今では四国の四万十川流域に生息するだけという。県内に十数例の「獺」地名があることから昔は生息していたとみてよい。

今一つ「鷦」^{うそ}という鳥がいる。太宰府天満宮や大阪天満宮などに古くからの鷦替神事（うそかえのしんじ）があり、鷦を形どつた木製の鳥を次々に交換して凶（うそ）を福に転ずることを願うという。県内に鷦替神事の痕跡があることは寡聞にして知らない。加治木の宇曽ノ木は鷦を形作る材木に由来する名とも思えない。

原典に立ちもどるのが捷径と考え『三国名勝図会』に当たつてみた。獺連瀑（うそぬきのたき）とある。連（ぬき）という漢字は漢和辞典にも見当たらないが、シリスの崖にトンネルを横に掘つて湧水を得る貫（ぬき）のことを指すのであろう。獺が貫から出現すれば獺貫の呼び名が付く。獺貫が宇曽ノ木に変化したとみてよい。この話にはうそは考えられない。

二十年前、溝辺の台地を発掘した時、真夏の暑さは猛烈だった。土方仕事のおばさん達はホーイ・ホーイと大きな裏声をあげていた。そうすると涼しい風が吹くのである。これが正真正銘のウソ吹きとその時知った。

動物に由来する地名

(32)

：獣の巻：狐迫 平田信芳

「狐」の付く地名は結構多い。県内に91例ほどある。狐迫(28)・狐塚(20)、この二つで半数を越える。狐は迫に生息しているものが多く、狐が死ぬと塚を築いたとみられる。以下、狐平(9)・狐ヶ尾(7)・狐原(4)・狐穴(4)・狐ヶ段(3)・狐ヶ岡(2)・狐石(2)、狐岩・狐ヶ宇都・狐川・狐久保・狐崎・狐ノ尻・狐巣・狐畠・狐ヶ鼻・狐堀・狐山など各一例になる。平・岡・段・原などにも少数派ながら狐がいたようだ。

きつねうどん・たぬきうどんは狐の好物という油揚げから派生した表現で、狐や狸と直接的な関係はない。狐と狸の化かし合いとも異なり、何ということもなくごま化されているにすぎない。狐汁と狸汁。文字の上では承知しているが、実際に味わったことはない。いつかはと思うが、いろんな意味でブレーキもかかる。

正一位稻荷大明神はやはり恐れ多い。島津家初代の忠久は住吉稻荷社の境内で狐火に守られて出生したとか、泗川の戦で赤狐と白狐が現れて敵の火薬庫に火をつけ大勝利をおさめたとの話を聞くと、狐を食う願望は不謹慎なのかなと思つたりする。薩摩兵児をイメージアップするのに最も房わしい大石兵六は吉野の原に狐退治に出か

けるがまんまと化かされる。鹿児島銘菓の一つ「兵六餅」のトレードマークは赤鞘を差し腰をからげた大石兵六とひっくり返つていてる狐だが、兵六餅の甘さにだまされるに對して鶴の吸物を馳走にと所望したら狐の吸物をと言い返され雌雄を決することになつた島津氏・肝付氏の争いを思う時、鶴は天然記念物の一聲であきらめるとして狐汁だけは味わつてみたい。狐を食つてはならないとのきまりはないはずだが、実際に狐を食つた話、狐を食わせてくれる所の情報はない。牛・豚・羊・兔・馬・鷄・鴨・雉子・七面鳥などが食材として口にすることが出来る限度なのだろうか。

上野原の連結土塙を見た時、縄文時代の人々は猪・鹿・兎だけを燻製にしたのか、狐や狸は毛皮をとつた後に燻製にしたり蒸し焼きにしたのではなかろうか、狐・狸・兎の皮などをなめして首に巻いたり腰に敷いたであろうなどと空想を楽しんだ。九千五百年前の上野原の住居址群と一口でいうが、世界最古の農耕・牧畜の遺跡として教えられるジヤルモ・イエリコの遺跡と同時代か、それよりも年代が古いかも知れない。上野原の報道は世界史的視点が欠けていたようだ。このことは狐に化かされる話ではない。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(33)

・獣の巻・熊谷と熊迫

平田信芳

鹿児島県の山々で熊が出没するという話は聞いたことがない。しかし、「熊」の付く地名はあちこちにある。その昔、熊が生息し、猟師が狩りをした痕跡を示す地名を考えざるを得ない。中世・近世の武将たちが鹿や猪を射た話は多いが、熊を仕留めたとの話は寡聞にして知らない。「熊」の付く地名はそれ以前のものが多いのだろう。例のごとく地名カードから「熊」地名を拾いあげてみた。ただし「隈」地名は省略した。

熊谷・熊ヶ谷・熊ノ谷など（8例）……鹿児島市平川・串木野市下名・福山町福山・吹上町永吉・垂水市海潟・穎娃町牧ノ内・大隅町須田木・吹上町湯之浦
熊迫・熊ヶ迫など（7例）……鹿児島市岡之原・阿久根市大川・大口市小木原・垂水市市木・加治木町西別府・伊集院町上神殿・伊集院町下神殿

これらその他に熊田（6）・熊ヶ尾（4）・熊ヶ山（3）・熊野（3）・熊ヶ内（3）・熊狩倉（2）・熊平（2）・熊牟礼（2）、以下は各一例。熊穴・熊屋・熊ヶ宇都・熊ヶ浦・熊ヶ鼻・熊ノ細・熊之馬場・熊川内・熊越・熊八重・熊渡瀬・熊ヶ瀬戸・熊須・熊ノ小路などである。熊野権現社に由来するものもあるが、大半は「熊」に由

来する地名とみてよい。しかし熊を神の使いとみるアイヌの習俗に似たものも残つていないので「熊」地名の年代を把握するのは困難である。

熊鷹・熊蜂・熊蟬などは大きくて強いことを示す形容詞的用法である。熊襲をこれと同様の表現とする見方は本居宣長以来根強い。国分・隼人地区は熊襲伝説の中心地で、熊襲穴・熊襲征討時にその四肢を埋めたという枝宮。熊襲時代の重要な防衛拠点だつたという七隈などがいるのだが、得体の知れない熊襲穴で熊襲鍋をつつきたある。私は球磨贈於という地名に由来すると割り切つてがる人が相も変らず多い。熊襲に憧がれる人々の夢を醒ますために国分の七隈を分析してみる。七隈とは「笑隈・獅子隈・富隈・平隈・隈崎・星隈・恋隈」だという。これらが熊襲時代の重要な拠点だとすると、笑・富・星・恋に熊襲たちがこだわったと考えざるを得ない。一体これはどういうことなのか。笑・富・恋に最も執着し、星神への祈りに明け暮れした人々（大隅國府の役人たち）の作り話ではないのか。

クマタカヤマならば熊鷹の生息する山になるが「タカクマ」となると、解釈が難しくなる。高隈の山並みを眺めては動物園の熊同様、行ったり来たりでその意味を考えさせられる。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(34)

・獣の巻・蝙蝠谷 平田信芳

脇本星浪氏宅はその昔「犬追馬場」と呼ばれた筋（小路）に面している。国分高校グランドに向かつて歩くと、やがて右（北）に入り込む脇道がある。この脇道はほどなく山道に変る。この山道は舞鶴城の搦手から城山（山城）に通じる間道であつた。麓に居館、背後の山に詰の城（逃げの城）という島津家の城構えの中で、館と詰の城を結ぶ重要な通路であつた。途中にいくつもの分れ道が出現するが、登る時は右の道、右の道と選んで行けば頂上に達する。下る時はその逆に左の道、左の道を降りて来ればよかつた。知らぬ間に城山団地が造成され、この間道が断ち切られたのは惜しかつた。城山団地を除くその前後は今でも昔のままの山道が残つてゐる。

十数年前の夏休み、舞鶴城址東北隅にある伊勢神社の裏から間道に出て山道を登つた。途中で子供たちに出会つた。虫取りに来てたのだろう。此処はなんという所かと聞いてみた。「こうもり谷」、元気のよい返答だつた。帰宅して国分市上小川の小字一覧を見たが、そんな地名は見当らなかつた。子供たちが名付けたものなのか、土地の人々が名付けた俗称地名なのかをその後確かめることはしなかつたのだが、地名の命名・発生を納得させるの

に充分なよび名である。蝙蝠は昼間は暗い所に隠れてぶら下り、夕方から飛び回るので目立つ存在ではない。そのため蝙蝠を目印として名付けられる所は、昼なおうす暗く昔から不気味に感じられていたのだろう。「蝙蝠」地名は非常に少ない。命名としては自然だが、例は少ない地名になる。私の地名カードにあるのは次の9例だけ。蝙蝠——川内市田海・加治木町西別府・開聞町仙田
蝙蝠宇都——吉田町東佐多浦・大根占町馬場・日吉町日置

蝙蝠穴——鹿児島市五ヶ別府
蝙蝠ヶ迫——輝北町諏訪原

蝙蝠谷——国分市上小川（俗称地名）

国語辞典をひくと、かわほり・かくいどり・へんぶく・てんそ・こうぼり、とある。かわほり・こうぼりは俳句によく用いられる古語で「こうもり」はこれらの変化形。へんぶくは蝙蝠の音読み、てんそは空飛ぶ帛（天帛）。蚊食鳥は蚊が好物であることを示す別名。中学時代の友人に「蚊食鳥」という文芸誌を企てたのがいたが、あの世に去つてしまつたので「蚊食鳥」のその後を確かめる術もない。思えば彼は蝙蝠のような存在だつた。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

◇鹿児島の三句◇

句碑や墓碑名の句など

平田信芳

句碑・歌碑・文学碑などが各地に立てられている。弟子・友人・知人たちが作者ゆかりの地を選んで立てたのだろうが、観光宣伝に利用されているものが多い。作者がそのような石碑を作ることなど遺言するはずもないから、故人追慕にしては大袈裟な演出だと思って眺めている。また殊更に崩した文字をなぞつて石工に彫らせているわけだから、石碑の文字そのものに魅せられることもない。句・歌・文章などに感激する口マンはなく、専らその石材の産地に思いを馳せている。このような朴念仁があるので三句の選びようがない。

新聞の俳句欄・短歌欄を通して察せられる日本の俳句人口・短歌人口には羨望というより、ねたましささえ憶える。厖大な俳句人口・短歌人口を背景に句集、歌集が作られるのであるから日本の出版業が潤つているのだろうと奇妙な理解を示すだけ。

句碑・歌碑・文学碑などが各地に立てられている。弟子・友人・知人たちが作者ゆかりの地を選んで立てたのだろうが、観光宣伝に利用され

こと荒立てる筋合いのものでもないと納得している。

県下をくまなく歩いたわけがないが、石碑や墓石を訪ね歩くことが多い。句集や歌集などが静かなブームとして作られているにもかかわらず、墓石に刻んである例は気付かない。作者の生誕地・居所・墓所などに刻まれたものであれば、鈍感な者でも心打たれるものがあると考える。

加治木町反土の東楽寺墓地・本誓寺墓地に蕉下庵玉笥（しょうかあんぎょくし）と千鳥庵水巴（ちどりあんすいは）の墓があり、それぞれに多くの句が刻まれていたことを思い出して花ざかりの一日、加治木に出かけた。東楽寺墓地・本誓寺墓地と名前では区別されているが一連の墓地群で、二つの墓は二〇メートルも離れてはいない。文化財保護に熱心な加治木町は新しい案内板をそれぞれの墓に立てているが、日蔭になる

位置に配慮する気配りが欲しい。水

巴の碑には苔が張りついていた。玉笥と水巴の墓碑で氣付いたこと

は、どちらも本人の作品は刻んでなく、弟子や仲間たちの追悼の句ばかりであるということだつた。追悼の一

句はそれぞれの思いが込められており提示しやすいのだろうが、故人の代表作を選ぶのは結局は至難なことだつたに違いない。自分の代表作はこれだと言い切る俳人などいないのだろう。したがつて師の代表作はと断言できる弟子もいないと思われる。

蕉世四代、蕉下庵玉笥居士、天明二寅天九月十二日の墓碑銘にある二十一名の句の筆頭は「名は代々に残んすいは」の句があり、それぞれに多くの句が刻まれていたことを思い出しても惜しや散紅葉女水巴。

賦命六十四、諱名水巴、立山善兵衛養母、文化二とせ年正月十五日の墓碑銘にある二十三名の句の筆頭は「人いつこ梅は垣根にありながら琴松」。墓碑銘の句は淋しい。

（考古学者・鹿児島地名研究会
世話役）

動物に由来する地名

(35)

・獣の巻・狸山 平田信芳

かちかち山・文福茶釜・鉢々寺の狸ばやしなどに眼を輝かし、浮かれて踊るうちは可愛い。なまいき盛りになると、たんたん狸の○○は風もないのにぶらぶらと大人たちを冷やかし、酒が飲めるようになると紫香樂焼のホーデン侍従殿に敬礼しての梯子酒。老境に入ると煮ても食えない狸親父となり、都合が悪くなると狸寝入り。子狸は愛敬もあるが、古狸は始末に困る。とらぬ狸の皮算用とか狐と狸の化かし合いと聞かされでは狸汁もまずくなれる。

ところで狸を付けた地名はあちこちに見られる。『鹿児島県地名大辞典』(角川)の小字一覧にみえる「狸」地名は次の通りである。

狸山(8)——西之表市現和・姶良町北山・穎娃町御領・穎娃町別府・川辺町上山田・知覽町塩屋・祁答院町蘭牟田・末吉町深川

狸穴(8)——指宿市十二町・牧園町万膳・菱刈町花北・穎娃町牧ノ内・開聞町十町・開聞町仙田・山川町利永・財部町下財部

狸迫(5)——鹿児島市西別府・鹿児島市下福元・加世田市内山田・喜入町前之浜・知覽町塩屋

狸ヶ平(4)——加世田市川畠・加治木町小山田・穎娃町牧ノ内・川辺町下山田

狸坂(2)——加世田市武田・串木野市上名
狸ヶ宇都(2)——東郷町斧渕・東市来町養母

狸ヶ滝(鹿児島市中)・狸ヶ前(指宿市西方)・狸ヶ原(枕崎市西鹿籠)・狸添へ(枕崎市別府)・狸ヶ峰(穎娃町牧之内)・狸久保(大根占町馬場)・狸ヶ谷(入来町副田)などは各一例。

これらの地名例から考えると、狸は山奥でなく人里近い所に棲息していたことが判る。夜行性で眼がらんらんと光つて見えるので、不気味な夜道を歩いて狸に遭遇すると人間の方が肝を冷やし、おびえた挙句に狸に化かされた昔話や伝説をつくりあげたのだろう。

ときたま、汽車とか電車に乗るために、十五分ばかり鹿児島駅まで歩くことがある。その途中、猫が車に跳ねられて死んでいるのをよく見かける。夕方帰宅時には薄く板状になつており、次の日に見ると粉となつて消え去っている。犬の死骸は滅多に見かけない。鎖でつながれているからだろう。先日、犬に似たものがつぶされていた。よく見ると狸。狸汁用に持つて帰る者もいらないらしい。人里を徘徊すると、毛皮にされるどころか、粉末にされて吹き飛ばされる世の中となつた。狸が住む山が開発でなくなつたのだろう。

動物に由来する地名

(36)

：獣の巻：猫尾（ねこのお） 平田信芳

世の中には犬好きと猫好きがいるようだ。仮りに犬派と猫派と呼んでおこう。子供たちが小学校・中学校に通う頃までは、猫を飼つた時期もあるし犬を飼つたこともある。川内にいた時、夜な夜な天井を走り回る兎に対応するために猫は必要な存在だった。子猫のうちは小さかつたので、名付けて「チビ」。子供たちと同様に大小便以外は自由放任。やがてチビは兎とりの名人になつた。娘が小学生の時、兎をねだつたので飼うこととした。数日後犬にやられて娘はベソをかいて庭の隅に埋めていた。その代償に雑種だつたが恰好の良い子犬をあてがつた。息子がその頃読んでいたフランスの作家の名をとつて「ジュネ」と名付けた。犬の登録に行くと、係りの人から変な名前ですねと云われるのが毎年のことだった。ジュネは老衰死するまで十数年間庭でよく吠えた。

このような次第なので私は犬派でも猫派でもない。また猫可愛がりは性に合わない。「犬」地名に比べると「猫」地名は少ない。例によつて『鹿児島県地名大辞典』（角川）の「猫」地名を以下に列挙する。

猫尾（6）——鹿屋市旭原町・鹿屋市川東町・鹿屋市池園町・垂水市新城・吾平町麓・根占町川北

猫山（5）——姶良町大山・三島村硫黄島・川辺町平山・川辺町田部田・知覧町厚地

猫岡（2）——川内市山田・串良町細山田

猫岳（2）——川内市高江・加治木町木田

猫打（3）——西之表市伊闌（猫之氏）・福山町福地（猫内）・福山町福地（猫宇治）

猫迫（2）——牧園町万膳・串良町下小原

猫原（2）——串木野市上名・長島町藏之元

以下は各一例。猫小路（宮之城町虎居）・猫瀬（国分市上之段）・猫田（大浦町大浦）・猫滝平（根占町川北）・猫塚（樋脇町塔之原）・根子坪（東郷町鳥丸）・猫丸（東市来町養母）・猫村（東郷町斧渕）。

猫尾・猫山・猫岡・猫岳が地名としては多い。背中を丸めた猫の形状に見たてたものが中にはあるかも知れないが、命名の動機としては猫が棲む山・岡をそのように名付けたのだろう。川内では朝夕「猫岳」を眺めて暮したが、猫の形を想起させられることはなかつた。なお、「尾」が地名語尾につく場合は普通「峰・岡」を指す。

飼い猫の中には尻尾を切られたのがいるが、長い尻尾の方がバランスもとれるし、子猫にじやれさせて敏捷性を体得させているようにみえる。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(37)

虫の巻：稻子田 平田信芳

蝶・とんぼ・蟬・バッタ・きりぎりす・かまきり・かみきり・かぶと虫・蛍・てんとう虫などを子供の頃はよく捕えて遊んだ。昆虫から見れば子供は天敵だった。おとなから見ると小さすぎて興味の対象ではなかったのだろう。イナゴ・イラ・蜂を除いては虫の名を付けた地名は例が少ない。私の地名カードにはアブ(2)・蟻(2)・ケラ(2)・蟬(1)・蛍(1)などが付いた地名もそれぞれ一・二例あるはあるが、それだけでは考察の対象としにくい。

『鹿児島県地名大辞典』(角川)の「小字一覧」にみえる「イナゴ」地名は次の六例。地名としては多い方ではない。

稻子(イナゴ)	輝北町市成
稻子田(イナゴダ)	金峰町新山
イナゴ田	穎娃町郡
稻子崎	南種子町島間
稻子泊	南種子町島間
稻子渡瀬	中種子町田島

昔は夏から秋にかけての時期、田圃に行くとイナゴが稻の葉にわんさか群がっていた。親孝行の子供たちは、

おかげ用にと嬉々として取つていた。蛋白質に富む食料で、農家の子供達の栄養源の一つだつた。農薬撒布が常識化した今日、イナゴを見かけることもなく、当然、イナゴのつくだ煮が食卓に登場することもなくなつた。

学生時代、「後漢書」の講義を受けた時に「蝗害」という文句がしばしば登場するのに驚いた。昔は蝗(イナゴ)の異常発生で穀物の葉が食い尽され、凶作・飢饉となることがしばしばあつたのである。今は農薬の使用でイナゴが絶滅したために「蝗害」はなくなつたが、農薬使用による「公害」が起こりつつあるのではないか。人々がまだ気付いていないだけなのかも知れない。蝗害は自然のバランスが崩れた時に発生する現象であったが、異常発生後はバランスのとれた自然へ戻つていた。自然には復元力があつたのである。現在発生しつつある各種の公害は人為的産物であるから、復元力は容易なことではなく、自然破壊が進むだけになる。

今年の新聞スクランブルは、二酸化炭素と温暖化現象、ダイオキシンで大にざわい。厖大な分量になりつつある。なかでも、ダイオキシンは、小・中・高の焼却炉使用禁止にまで発展した。ダイオキシン発生の根源を断つ発想が出て来ないので変な世の中だといえる。イナゴにとっては親孝行の子供たちが天敵だったのだろうと回想する時代が懐しい。

(鹿児島地名研究会世話役)

動物に由来する地名

(38)

・虫の巻・伊良ヶ谷

平田信芳

伊良山——鹿児島市中
イラ脇——吉田町西佐多浦

イラの類似表現とみられる「エラ」地名もある。

永良ヶ迫——高尾町江内

エラガ迫——大隅町須田木・輝北町諏訪原

恵良山——長島町下山門野

山蔭や石垣などのあまり日当りのよくない所にイラクサがよく生えている。葉に触るとガラス状の針が肌に突き刺さり、ちくちくを通り越した痛さを憶え、同時にたまらなくかゆくなる。かゆみはどんどん広がり、いらさらせられる。イラクサの名は言い得て妙である。

『鹿児島県地名大辞典』(角川)の「小字一覧」から拾いあげた私の地名カードに、伊良ヶ谷が10例、伊良ヶ迫が7例、その他の「イラ」地名が若干ある。以下に列記する。

伊良ヶ谷——指宿市十二町・国分市郡田・姶良町北山・

鶴田町神子・郡山町郡山

イラガ谷——国分市上之段・姶良町寺師・福山町佳例
川・輝北町下百引

伊良賀谷——鹿児島市下田

伊良ヶ迫——加治木町西別府・高尾野町柴引・穎娃町
牧之内

イラ迫・イラノ迫・イラガ迫——鹿児島市黒神町・笠沙町赤生木・穎娃町郡

飯良迫——出水市上大川内

以良原——鹿児島市黒神町

イラクサの場合、一度ひどい目にあうと、近寄らないよう気につける。しかし、不用意に日当りの悪いヤブに入り込んで正体不明の虫に刺されることがよくある。いわゆる「虫さされ」に見舞われる。鹿児島語ではこれを「イラが刺した」という。イラガタニ・イラガサコなどはイラクサの植生地名でなく、虫さされに見舞われる場所に付けられる地名のようだ。

また鹿児島語ではクラゲもイラと表現し、クラゲに刺されることも「イラが刺した・イラに刺された」という。刺されていらいらするものを「イラ」と名付けているようだが、虫さされのイラは私には正体が分からぬ。「ぶと・ぶゆ・ぶよ」などと呼ばれる虫だと思うのだが、「ぶよが刺した」とか「ぶとに刺された」という表現はあまり聞かない。アブや蜂と違つて刺されたのも気付かぬうちにかゆくなり、いらいらさせられるから始末が悪い。今の世の中、何が何だか分からぬうちに消費税があがり、証券会社や銀行がつぶれる。伊良ヶ谷に迷い込んだような感じである。(鹿児島地名研究会世話役)

動物に由来する地名

(39)

：虫の巻：蜂迫と蜂窓

平田信芳

迫・八久保になると、蜂・鉢のどちらなのか判断がつかなくなる。

八迫——出水市下大川内・川内市五代・大浦町大浦・
末吉町深川・大隅町中之内

鉢迫——川内市田海・川内市城上・蒲生町漆
蜂迫——加世田市内山田・川内市楠本

八は鉢か蜂のあて字だろうが、どちらにしても鉢状の形状地名なのか、蜂が巣を作っている迫なのか、判断しかねる。同様のことは「ハチクボ」にもあてはまる。八久保(55例)・八窓(17例)・鉢久保(3例)・鉢窓(10例)・蜂窓(1例)・蜂久保(1例)で、八久保・鉢窓の用例が圧倒的に多い。そのような中で少数例だが蜂窓・蜂久保も見逃すわけにはいかない。

蜂窓——薩摩町永野

蜂久保——中種子町野間

「八」は末ひろがりで縁起もよく、書き易いので鉢や蜂のあて字として用いられ易い。鉢か蜂かを一か八かで決めるわけにもいかず地名を解釈する上では厄介だ。鉢・蜂が混同することがない外国の地名と比較する必要がある。そこまでは考えるが、外国の地名は未検討。形状地形よりも生活臭濃厚な蜂の子・蜂蜜に結びつく地名と考えているのだが。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

これらは「蜂」にちなむ地名とみてよい。蜂巣は蜂の巣を採取した場所を示すのだろう。しかし、数が多い八

蜂巣ヶ谷——東市来町美山
蜂原——加世田市津貫
ハチ原——穎娃町上別府

いつものように『鹿児島県地名大辞典』(角川)の「小字一覧」から「蜂」地名を拾つてみた。

蜂ノ巣——鹿児島市五ヶ別府・川内市麦之浦・中種子町油久・中種子町田島・薩摩町求名

動物に由来する地名

(40)

魚の巻・鮎川

平田信芳

鮎魚（吉田町西佐多浦）
鮎受（金峰町花瀬）

鮎子ヶ宇都（吹上町永吉）
鮎坪（国分市上小川）

海や川や池などに生息する動物すなわち魚をはじめとする水棲動物に由来する地名例は少ない。水の中のことによく判らないし、水棲動物を目印として地名を付けなくとも他に目印となる動植物はいくらでもあるからである。

小学生の時は春から秋まで、学校にいる時以外は魚釣りばかりしていた。魚の気持も判り、餌をつつき始めてから食いつくタイミングを待つて釣りあげるコツも体得した。その頃は空気もきれいだったし、川や池も自然の調和が保たれていた。そして釣つて来た魚は蛋白資源となりカルシウム充足の栄養源となり得た。

中学生になると勉強の方が忙しくなり、魚釣りに熱中出来なくなつた。その延長で成人したので釣りにのめり込むこともなく、歳月を経て老成してしまつた。現在、釣りは静かなブームとなつており、女性の釣人も登場する世の中となつた。しかし幼い時に堪能したためか、釣りに惹きつけられることはない。

さて、数少ない「魚」地名に取り組むことにする。まず「鮎」から。私の地名カードには次の7例があるだけ。

鮎川（出水市上大川内・加世田市武田）

私の住んでいる稻荷川流域に八・六水害後の工事が一段落して、昨夏鮎が戻つて來た。テレビ・新聞でとりあげたので喜んでいたら、網を張つて一網打尽に捕つて行く男がいる。年の頃五十歳前後。捕り尽くせないほど、鮎が棲む川になつてくれたらと思う。また川の浄化を願う世の中は、考えてみれば変である。

動物に由来する地名

(41)

・魚の巻・烏賊ノ浦

平田信芳

イカ・貝・亀・鯨なども魚の巻で取りあげる。「イカ」を地名に付ける所はごく稀である。私の地名カードにあるのは次の二か所。

以加トコ（西之表市安城）

烏賊ノ浦（佐多町伊座敷）

どちらもイカがよく釣れる所なのだろう。「イカ」地名を拾いあげてみて、なぜ烏賊と書くのか不思議に思った。調べてみると、「イカが死んだふりをして水面に浮かんでいてカラスがついばもうとすると巻きついてカラスを餌食にするところから烏賊と書く」らしい。いかがわしいかさま説と思われる向きがあるかも知れないが、これは『日本国語大辞典』（小学館）にある説明である。さらにその典拠は和名抄になっている。いかめしい説をもつともらしくするために原典から引用しておく。「常自浮水上、鳥見以為死、啄之。乃巻取之、故以名之」（倭名類聚鈔卷十九）。

カラスは鳥の中でも利口な方だというが、それをだますのだからイカの知恵は大したものである。ところが、イカを釣る道具はエビの形に真似て作った餌木（えぎ）である。義父はイカ釣りによく出かけ、いくつもイカエ

ギを作っていた。人間が作つたいい加減ないかさま餌木に飛び付くのだから、烏賊の眼力の程は多分にあやしい。さて、ミズイカ・ヤリイカ・スルメイカなどは刺身・煮付・塩辛にして日常口にしている。イカは各種いかようにでも調理可能な楽しい食材である。するめの胴に酒を入れた酒が「するめ酒」で北国の名物。するめの味がしみ込んだ酒を飲んだ後に容器のするめを少しづつさいて食べる趣向だが、酔うほどの分量でないのでつまらない。正月の鏡餅にするめを添える風習があるのは、悪いことするめえの意味だと考える方が楽しい。するめでうまい部分は耳と御手。耳と呼んでいるがあればヒレで、方向舵にあたるものだろう。鹿児島語でいう御手（ごて）はスルメやカシワの足をさす。かぶりついて食うものはうまい。イカの胴に御手を切ったものと米を詰めて煮詰めるのがイカ飯だが、あまり食指は動かない。サツカーゲが盛んになつてイタリア料理が宣伝され出した。息子がイカ墨のスペゲティを作つてくれたが、舌も唇も真っ黒。どこにこくがあるのだろう。まだなじめない。

イカの塩辛でちびりちびりと焼酎を飲むのが似合つてゐるが、コレステロール値が上がるからイカ・タコの類はひかえろと主治医のご託宣。いかなる世の中になるのやら。以上イカの裏話。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(42)

魚見ヶ原——鹿児島市上福元

：魚の巻：魚見と魚釣 平田信芳

「魚」の付く地名は全国的にみるとかなりあるが、鹿児島県では数多い地名ではない。以下は私の地名カードにあるもの。

魚踊——国分市川原

イオガ下——笠沙町赤生木

魚窪——笠沙町片浦

魚地（イオジ）——長島町平尾

魚路村——笠沙町片浦

魚田——日吉町吉利

魚賀田——与論町朝戸

魚釣石——川辺町平山・吹上町和田

魚釣迫（イヨツザコ）——溝辺町麓

魚釣瀬（イオツイゼ）——長島町指江

魚菜——穎娃町牧之内

魚町——笠沙町赤生木

魚待（ウオマチ）——東町山門野

魚見——鹿児島市平川

魚見ノ上——笠沙町片浦

魚見岳（ウォミダケ）——指宿市

魚見棚（ウォミダナ）——里村里

ルビのないものが多く、断定は出来ないがイオとウオは五分五分とみられる。全国の地名例を『日本地名索引』・『日本地名総覧』などでみると、イオ地名は魚漁郷いおのすくな（岡山）と魚ノ田川（新潟）が収録されているだけで、他はすべてウオ地名。おもなものは次の通り。魚洗川（長崎）・魚岩（新潟・東京）・魚ヶ滝（兵庫）・魚切（広島・山口）・魚崎（兵庫）・魚島（愛媛）・魚津（富山）・魚住（富山）・魚瀬（三重・長崎）・魚谷（北海道）・魚釣崎（長崎）・魚釣島（沖縄）・魚釣瀬（鹿児島）・魚跳溪（北海道）・魚泊（愛媛）・魚泊の滝（青森）・魚止岩（宮城）・魚止滝（富山）・魚止山（新潟）・魚成（愛媛）・魚沼（埼玉）・魚ノ川（高知）・魚野地（新潟）・魚橋（兵庫）・魚渕（福島）・魚待（島根）・魚見（福井・三重）・魚見崎（静岡・長崎）・魚見岳（鹿児島）など。なお、魚町・魚屋町は随所にある。

鹿児島語では魚見（ウォミ）と魚釣（イオツリ）を使い分けているが、なぜそうなるのか判らない。『日本国語大辞典』によると、ウオが古く、イオは中世から近世まで方言にも残るとある。小学校時代、魚釣りに明け暮れていた頃、大物がかかると「大魚・大魚（ターアー・ターアー）」と人なつこく手網を差出して加勢してくれた同じ年頃の中国人少年がいた。以来、イー（yü）の発音とイオの結び付きが宿題として頭の隅にこびりついたままである。

（鹿児島地名研究会世話役）

動物に由来する地名

(43)

：魚の巻：鰐池 平田信芳

鰐川——加世田市津貫
鰐口——串木野市羽島

鰐池温泉。二度ほど行ったことがある。落葉散る散る

山間の湖畔の宿にふさわしい雰囲気の温泉である。賑やかな指宿のホテルと違つて静かであるのがよい。と云つても三十年ほど昔の話であり、現在どうなつてているのかは知らない。しかし、テレビのコマーシャルに登場しないから観光客がわんさと押しかける所ではなさそうだ。

湯治はそんな所が向いているのかも知れない。

水深五十六メートルのこの池で、その昔、体長五尺（約一・五メートル）の鰐がとれたそうだ。それで「鰐池」と名付けられたらしい。鰐池温泉の集落は江戸時代は「鰐門」と呼ばれ、その住民は明治になると「鰐」を苗字にした。しかし世の中に出で珍らしい苗字と引き合いに出されたことで改姓した人が多いという。

満潮時に海水が、遡つて来る川の下流域では鰐がよく釣れる。また鰐を捕るために石を積みあげて作る鰐塚を網掛川・別府川・思川の河口近くでよく見かける。しかし「鰐塚」は地名に昇格していない。「鰐」地名を調べてみたが県内の小字も例が少ない。

鰐ノ上——指宿市東方

鰐渕——加世田市川畠

『日本地名総覧』（角川）から「鰐」地名を拾うと次のようになる。

鰐池——鹿児島県揖宿郡山川町
鰐坂——東京都新宿区
鰐町——兵庫県伊丹市

鰐轟山——徳島県の山（一〇四六メートル）

鰐坂。うなぎのように曲がりくねった坂道であることからの命名。江戸っ子らしい理屈付けである。他は鰐がそれたり、大きな鰐がいたことで名付けられた。江戸・東京の命名は比喩的だが、他は即物的と考えてよい。東京は日本の真ん中で、日本の文化を代表すると考えているようだが、分析してみると中身はそんなことだ。鰐轟山は轟ノ滝の近くに大きな鰐が棲んでいると人々が信じ込んだことによる命名。鰐谷はその昔、低地や堀に鰐がいたのだろう。伊丹の鰐町は、江戸時代、万徳寺門前の南北の通りに名付けられた地名らしい。寺の門前町と鰐、酒の香りが匂つて来る。鰐池温泉は嗅覚を働かせない方がよい。硫黄のほのかな匂いを感じながら温泉につかり猪口を手にすれば、かば焼などはいらない。

（鹿児島地名研究会世話役）

動物に由来する地名

(44)

：魚の巻：海老野 平田信芳

観光地「えびの高原」に因んだ「えびの市」という自治体が宮崎県にある。えびのインターエンジもあり、鹿児島県民にとっては親しい地名でもある。「えびの」とは、霧島山に植生するススキが火山の噴出する硫黄によって赤褐色に変色し、あたかもエビのように見えることから呼称されたといわれる（角川日本地名大辞典、宮崎県）。「宮崎県の地名」（平凡社）もその由来については同様な解釈である。念のために『三国名勝図会』を開いたが、「えびの」は見当らない。江戸時代にはなかつた地名なのかも知れない。

私の地名カードにある「海老」地名は次の通りである。

海老園	鹿児島市吉野
海老原野	国分市福島
海老山	川内市城上
海老崎	栗野町幸田
海老野	牧園町万膳
海老ヶ迫	横川町下ノ・大隅町大谷
海老ノ子田	笠沙町片浦

これらは、色あいがエビのように見えるとの命名（海老野）だけでなく、エビのような形状（海老山・海老崎）、

エビがよく取れる所？（海老ヶ迫・海老ノ子田）、海老原という人物に因む地名（海老原野）など、各種各様である。エビを海老（かいろう・うみのおい・うみのおきな）と表現したために海産物との先入観を与えてしまつてゐるが、エビは池にも沼にも川にも生息していた。

魚釣りの餌にミミズをとつて行くこともあつたが、タモでなくえび小さなエビがわんさと捕れ、餌に不自由することはない。海釣りの場合でも、アセチレン＝ランプで海面を照らすと体長10センチメートルほどのエビが夜光虫の航跡を曳きながら近寄つて來た。それを捕れば餌が確保された。素早いエビをタモでかぶせ捕るのは、鬼ヤンマ・銀ヤンマを捕るよりも俊敏な手練が必要だった。

伊瀬エビが珍重されるのは「威勢がよい」との縁起を担ぐ語呂合わせに満足しているに過ぎない。また「止まらない止まらないカツパエビセン」のコマーシャルに釣られて、暇さえあればエビセンを噛つてゐる子供・若者が増えた。あたりを見回すと肥満児が増えている。これはエビセンと缶ジュース、それにエビ天のせいだろう。切れやすい子供・若者への反省を「エビ」は示唆してくれている。日本チームの攻撃はカツパエビセン並みのワングバターン。ワールドカップは負けるべくして負けた。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(45)

・魚の巻・貝殻崎と海潟 平田信芳

上野原遺跡が知られるようになってから鹿児島県の人々はやたらに縄文づいて来た。遺跡への関心が高くなつたことは歓迎すべきだが、遺跡は縄文だけとは限らないのである。上野原遺跡で舞いあがつてゐる国分の人々はその地名の根源である大隅国分寺一帯の歴史的環境整備は充分だと考へてゐるのだろうか。冷汗ものである。過去35年間嘗々と取り続けて來た考古学関係の新聞スクラップにもとづいて記事の分野別パーセンテージを示そう。

遺跡紹介記事全国二五八件・鹿児島県七八八件について

百分比で比較した。全国の数値と比べ易いように鹿児島県のものをカッコ内に掲げてある。旧石器3.8(7.1)、縄文5.9(33.5)、弥生9.2(16.2)、古墳23.4(14.8)、歴史考古35.6(28.2)となる。全国の場合は時代が下るに連れて増加するが、鹿児島県の場合には縄文遺跡の紹介が突出している。遺跡は縄文、歴史は明治維新の感覚なのである。

縄文時代の遺跡に貝塚があることはよく知られている。「貝」の付く地名によつて貝塚を探し遺跡の存在を明らかにする方法が当然考えられることだが、鹿児島県の場合「貝」地名と遺跡との結び付きは意外なほど顧られて

いない。金峰町宮崎にある阿多貝塚の小字は「貝殻崎」。地名に注目すればもつと早く知られてもよかつた遺跡である。以下、県下の主な「貝」地名を眺めることにする。

貝カラ崎（川辺町両添）・貝坪（隼人町見次）・貝和田（喜入町生見）・貝谷（出水市下大川内）・貝迫（垂水市田神）・貝森（垂水市新城）・貝寄（穎娃町牧ノ内）・貝底（喜入町前之浜）などがある。その近辺に遺跡を見出す可能性は大きいと考える。ただ貝平（加世田市小湊・鹿屋市天神）・貝元（隼人町小田）の場合、近辺に遺跡があることも考へられるが、狩平・狩元の転化もあり得るので現地を見て考察する必要がある。実際に見ていいないのでこれ以上論究しない。

末筆ながら「三国名勝団会」記載の「貝」の話を付記しておく。「終原村^{かるさ}輕沙……此地陸田の地中に貝殻多し、其地を掘ること浅きは三四尺、深きは五尺より九尺余に至る……」とあり、土地の人々は貝殻を掘り白灰を作つて売つたと記す。さらに大隅国海潟村崎山に「貝の形をした土貝」の珍産があり、「海潟村の名は是に由て起るとぞ」とある。貝の化石が出ることが早くから知られており、それが海潟（貝形）という地名の由来になつたようだ。

動物に由来する地名

(46)

：魚の巻：蟹田 平田信芳

わが家の位置は川筋・溝筋に沿つて距離を算出すると、稻荷川の河口から三百メートルばかりの所にある。その

ためか、屋敷脇の溝には小さな蟹がわんさとい。啄木のように蟹とたわむれる趣味もなく、また小さすぎることとどぶに生息しているために食欲の対象にもならない。

足元で毎日見ている蟹がどのような種類の蟹であり、そ

の生態・寿命などがどんなものであるかも一切知らない。昭和三十年代の前半はまだ独身教師で、市来町湊での下宿生活だった。下宿の裏は文字通りの市来の湊。秋になると下宿の息子は江戸時代に築かれた突堤にウケ籠を沈め、毎日面白いように山太郎ガニをとつて来た。勉強は好きな方ではなかつた中学生は蟹取りは名人だつた。毎晩しゃぶつた三太郎の味噌焼きは実に美味かつた。

蟹のうまさはよく知つてゐるが、「蟹」地名に対しても今まで惹きつけられたこともない。身近な存在であるためには「蟹」地名は少ない。私の地名カードにあるものを次に掲げよう。並べてみても食欲・知識欲を駆り立てるものではない。

蟹田（10）——指宿市西方・指宿市十町・指宿市十二

町・串木野市下名・川内市草道・始良町平松・蒲生町漆・隼人町野久美田・宮之城町屋地・東市来町湯田
始良町と東市来町は「かにた」、隼人町の場合は「かにでん」のルビがある。

蟹ヶ迫（3）——加世田市武田・菱刈町武田・吹上町花熟里

蟹浜（2）——指宿市岩本・川内市寄田

蟹原（2）——始良町平松・始良町脇元

蟹川（2）——中種子町納官・薩摩町長野

以下は各1例の地名。蟹ヶ渡（鹿児島市下福元）・蟹巣（東市来町伊作田）・蟹ヶ谷（吹上町田尻）・蟹頭（吹上町田尻）・赤蟹（喜入町前之浜）・蟹目石（東町川床）。

——このように「蟹」地名は海岸沿いの土地と川内川流域に多い。

横に歩く行動が人様の気に入られずに横目で見られるのかも知れない。ワタリガニ・アサヒガニなど海棲の蟹はハサミが両方同じ大きさでバランスがとれているが、干潟や陸地で見かける蟹は左のハサミがやたらに大きく右のハサミは極端に小さい。そんな奇妙な形が人気がない一因かも知れない。各地の蟹田に巢くう蟹も左のハサミが大きいのだろう。もし蟹田の蟹のハサミが左右対称ならば私は不見識を詫びるしかない。

（鹿児島地名研究会世話役）

動物に由来する地名

(47)

魚の巻・亀の甲

平田信芳

(2) 亀そのものを示す地名
亀ノ子(5)・小亀・白亀。女亀、どのようにしてオス・メスを区別したのか不明。

「鶴は千年、亀は万年」と尊ばれる。幻滅の思いをさせたくないためか、実際の寿命は知られない。人々はその通りに信じて長寿にあやかりたいと考える。めでたいことにはけちを付けるな。それが常識らしい。

『三国名勝図会』は、川内川流域各郷の物産に「亀と鼈(スツポン)」を掲げている。昭和三十年代、川内に住んでいたがそのような情報は耳にしなかつた。昭和三十年夏、市来の浜にあがつて来たアオウミガメに焼酎一升を飲ませて海に帰すのを見たのが、天然の亀を見た最後の経験。つい先日、稻荷川永安橋の下でスツポンを、鶴丸城址の堀でミドリガメとスツポンを見かけたが、これらは養殖崩れ・ペット崩れというべきもの。天然の亀など容易に見られない自然環境悪化の時代となつた。

「亀」地名は、いうなれば化石的存在である。いつものように地名カードにある鹿児島県の「亀」地名を列挙する。カッコ内の数は件数を示す。

(1) 形が亀に似ていることによるもの

亀甲(18)・亀石(5)・亀山(3)・亀ヶ尾(3)・亀形・亀

(3) 亀の生息を示す地名
亀原(3)・陸棲の亀がいたのか? 亀津(3)、亀迫(2)・亀沢(2)・亀田(2)、亀里・亀籠・亀瀬・亀滝・亀又(4) 意味不明
分亀・亀徳・亀焼、亀を焼いたのか瓶・甕を焼いたのか判断出来ない。

県内で最も多いのが亀甲(かめのこう)という地名。
『日本地名索引』(アポツク社)で全国の「亀」地名を眺めると亀山(15)・亀崎(13)・亀谷(10)・亀田(9)・亀甲(8)・亀島(8)・亀岡(8)の順となり、「亀の甲」のように少々盛りあがつた地形ということだけでなく、「年の功に亀の甲」の語呂合わせのニュアンスも加えて、人々の長寿と幸福を願う瑞祥地名と解釈すべきである。

その昔、大隅国府があつた国分市府中の祓戸神社(旧名守公神社)一帯は亀ノ甲という小字である。国府は「こふ(こう)」とも読まれたので大隅国府の名残りを示す地名と見てもよい。長門国府所在地も「亀甲」という通のこと。めでたいな。

(鹿児島地名研究会世話役)

首

動物に由来する地名

(48)

：魚の巻：「鯨」地名 平田信芳

クジラ当——伊仙町古里
鯨畠——西之表市西之表

鯨浜——笠利町喜瀬
鯨俣——伊仙町木之香

秋の夜長を考えることもなくテレビを見ていると、横

浜ベイスターズが優勝を決めて権藤監督だけでなく張り子のごんどうくじらも胴上げされていた。監督とベイス

ターズの前身ホエールズを懸詞にしたらしい。テレビを見ながら「鯨」をテーマにすることを思い付いた。魚の

巻も手持ちの材料が少なくなり、魚形の大形動物ということで鯨にも登場を願わざるを得ない。しかし地名カードを見て驚いた。「鯨」地名が十例ばかりあるのだが、同一地名がないのである。地名研究は同じ地名を拾い集めて帰納法的に考察するのが一般的な手法であり、同一地名がないのは取扱い上始末に困る。形が鯨に似ているところからの命名は少なく、でかいことは良いことだの感覚で付けられた地名が多い。それが「鯨」地名の特徴と見てもよい。このようにつかまえどころのない地名だが、折角のことだから参考までにその所在地を掲げておく。

鯨石——市来町湊町

鯨ヶ宇都——頴娃町別府

鯨切田尾——南種子町中之上

鯨越——笠沙町片浦

鯨迫——日吉町日置

鯨を追い込んで漁をしたことに由来する鯨浜と、その形が似ている鯨石以外は、鯨とどのような関連があるのか、現段階では見当も付かない。したがつて論の進めようもない。

止むなく念のために何故ごんどうくじらと呼ばれるのか、国語辞典で調べてみた。長崎県五島近海でよく捕れた「五島鯨」が「ごんどうくじら」に転写したものようだ。鹿児島県で鯨ウォッチングの場として知られつづあるのが野間岬沖。野間岬は五島列島に距離的にも近く、そこで見られる鯨は恐らくごんどうくじらと考えてよいのだろう。ごんどうくじらは体長四～五メートルの大きさで、鯨の中では小さい部類に属する。それよりも小さいのがイルカの類。イルカは最も小さい鯨と見る解釈もある。

十日ほど前、磯浜まで散歩に出かけた。琉球人松を過ぎた辺りで、イルカの群が二グループ、岸から百メートル程の所で次々に丸い背中と尖ったヒレを見せていた。

錦江湾の隅くじらにもイルカがいるか、と妙に感心した次第。

〔鹿児島地名研究会世話役〕

動物に由来する地名

(49)

・魚の巻・鯖渕

平田信芳

夕食時、皿に盛られた刺身が出た。いつになく、うまかった。滅多にうまいと声をあげないのだが、思わずうまいと云つた。首折れ鯖よと女房殿は得意気にいう。次の日、再び刺身の皿が出た。またサバか。これはアジ。鯖も鰯も見分けが付かないのだからと手きびしい。昭和二十一・二年の食糧難の時代にも鯖はよく食べさせられ、鯖の刺身は酢で殺せなどと教えられたものだが、近頃は鯖も大衆魚ではなくなつたようだ。

ところで鹿児島県の西北端、出水市に鯖渕という難解な地名がある。『地名用語源辞典』(東京堂)を見ると、

「さば」、①粘土に小砂のまじつたもの、②粘土岩、③連なれる岩、④サハ(沢)の濁音化、⑤サンバイサマ(田の神)、⑥サ(狭)・バ(場)で「狭い所」の意か、⑦動詞サバク(捌)の語幹サバで「崩壊地名・浸食地名」をいう語か、とある。鯖渕はこれらどれになるのか見当も付かない。県内の「鯖」地名を見直してみよう。次の四例しかない。

鯖渕——出水市の大字

鯖ヶ平——郡山町南俣
サバヤケ——輝北町平房

鯖ノ口鼻——東町京泊(五万分一図)
郡山町と輝北町は山間地で海の魚とは縁が薄い。これを考えるのに好対照となる地名が熊本県の婆婆神峠である。西南戦争の時に戦場となつた所で、峠もしくは峰に祀られた婆婆神を語源とするのが地名解釈の方法としてはまず妥当であろう。また古来有名な地名に周防国佐波郡佐波郷もある。周防国府の所在地で、古くは沙麿・娑婆・佐婆などと書かれ、日本書紀や豊後國風土記にも沙麿県(さばのあがた)の名が見える。沙麿県は景行天皇・仲哀天皇の時に熊襲征討の兵站基地の役割を果たしたといわれる所で、南九州とも縁がある。また枕草子二四五に「騒がしきもの。走り火。板屋の上にて、鳥の齋の生飯(さば)食ふ」とあるが、生飯は仏教用語で鯖とは関係ない。

四例だけの地名の中で、鯖渕に最も近いのは鯖口鼻である。鯖渕(さばぶち)と鯖口(さばぐち)は、チンギスハンとジンギスカン、フビライとクビライという発音の差と軌を一にする。鯖が口を開いた形状すなわち鯖の口(鯖口)に似た地形から名付けられたとみられる。それとも婆婆神に由来するのか。この世の婆婆の地名解釈はさばさばしたものとはほど遠い。婆婆の風に吹かれて、そう思う。

(鹿児島地名研究会世話役)

動物に由来する地名

(50)

：魚の巻：和仁浦・鮫島・鱗口 平田信芳

鰐（ワニ）・鮫（サメ）・鱗（フカ）。どれもどう猛というイメージが強いが、すべて同系統の魚の呼び名であつた。何故このように違うのか。このこと自体が日本語の特色であり、言葉の由来を判りにくくさせている因でもある。あえて区別してみよう。

最も古い呼称であるワニは、ワニザメの省略形。因幡の白兔がワニザメをだまして丸裸にされる物語は出雲神話の初めの部分になる。和仁浦（東町浦底）・和仁浜（東町浦底）ではその昔ワニザメがとれたのだろう。時偶神社の社殿で見かける綱を左右に振つて鳴らす鰐口（ワニゲチ）は、口が横に大きく裂けていることからの命名であり、元々は仏殿に掛けられていた。神社にあるのは神仏混合の名残である。現在、ワニと呼ばれるのはアリゲーターやクロコダイルなどの爬虫類である。現代人は大口で入ることからワニ皮のカバンや財布をやたらに珍重している。

中世以降は「鮫」の呼称が一般的となる。鮫迫（牧園町持松）・鮫島（市来町大里）という地名があるが「鮫」とどのように関わるのか、さだかでない。鹿児島県には

鮫島という苗字の人が多い。元々は駿河国富士郡鮫島郷に由来する人々で、平家滅亡の後、薩摩国に領地を与えられた幕府御家人の子孫になる。駿河国では「サメジマ」と呼んだが、こちらに移つてからは濁音がとれて「サメシマ」と呼ばれるようになった。市来町の鮫島は魚ではなく、鮫島姓と関係があるのかも知れない。皮肌がざらざらして握ると滑らないことから、その昔鮫の皮は刀の柄や鞘によく用いられていた。鮫の皮だけでなく鹿の皮も武具の部品によく用いられ、戦国時代にはどちらも国産品が不足し、交趾・安南（現在のベトナム）産のものが多く日本に持ち込まれた。それらを交易品として運んできたのがポルトガル商人やオランダ商人であつた。その交易実体は未開拓の研究分野でもある。

鮫の中でも大型で深い所に棲んでいるものが「フカ」と呼ばれる。深い所にいるからフカという名前の付け方は発想が単純であり、反つて面白い。ものの名前の付け方などはこのような単純な発想に出発点があるのかも知れない。地名例では鱗口（上屋久町小瀬田）がある。鱗の口に似た形状なのだろう。近頃は魚屋がすたれてしまい、昔はよく口にした「ゆで鱗」も見かけなくなつた。ゆでふかの美味なところは、やはり「皮」だった。落着くところは皮ばかりの話になつてしまつた。

（鹿児島地名研究会世話役）